ゐのはな

千葉大学医学部同窓会報　第182号　題字　故 鈴木五郎（大11卒　元ゐのはな同窓会長）

編集発行者
千葉大学医学部
ゐのはな同窓会報編集部
〒260-8670　千葉市中央区亥鼻1-8-1
千葉大学医学部内
ゐのはな同窓会
電 話（043）202-3750
FAX（043）202-3753
e-mail：info@inohana.jp
HP：http://www.inohana.jp/

令和元年度 ゐのはな同窓会総会開催

令和元年度ゐのはな同窓会総会が令和元年６月８日（土）午後３時20分より、千葉大学医学部附属病院ガーネットホールにおいて開催された。

中村眞人理事の司会により開会となり、会議に先立ち物故者64名の冥福を祈り黙祷を捧げた。済陽高穂会長の挨拶に続いて白澤浩理事より会務報告があった。各議事については白澤理事、幡野雅彦理事から説明があり審議・了承された（議事要旨は28、29面に掲載）。最後にメモリアル事業委員会について吉川廣和同委員長より説明があった。

総会に引き続き令和元年度ゐのはな同窓会賞の表彰式、加藤直也氏が座長となり吉村健佑氏の講演「若手育成の取組の実績と今後」、織田成人理事が座長となり山口智志氏の講演「スポーツメディクスセンター：スポーツに関わる全ての人の安全、安心のために」、生坂政臣氏の特別講演「誤診学のススメ－外国人編－」が行われた（講演内容は２、３面に掲載）。

懇親会では新名誉会員等からご挨拶を頂き、歓談の時を過ごした。

千葉大学ゐのはな同窓会長に 済陽（わたよう） 高穂（たかほ） 氏（昭45）が再任されました。

メモリアル事業計画

メモリアル事業委員　白澤　浩（昭57）

懸案のメモリアル事業について、令和元年８月１日に吉川廣和同窓会副会長を委員長とする第２回メモリアル事業委員会が開催され、以下の概要を確認し、評議員および一般会員にアンケート調査を行い、意見収集を行った後に再度検討を重ね、11月の理事会に諮ることとなりました。評議員および一般会員の皆様におかれましては、アンケート調査にご協力頂き、ご意見を頂ければ幸いです（アンケート概要31面に掲載）。

【メモリアル事業案骨子】

・２０２４年に千葉大学医学部は１５０周年を迎えるが、大学の事業とは独立した形で同窓会としてメモリアル事業に１５０周年記念を組み込む。

・２０２１年の新研究棟完成に伴い、現在の「医学部本館（旧病院）」は閉鎖されることが決定されている。千葉医科大学・千葉大学医学部の歴史を刻んだ「現医学部本館（旧病院）」のその後の計画は大学としては白紙の状態であることから、千葉大学医学部および現医学部本館の歴史・レガシーを記録として残す事業を同窓会として行いたい。

・事業案としては、現医学部本館前面を改修し一部を保存する工事、メモリアルウォール建造、年史パネル・本館モデル・記念グッズ・本館の画像・映像記録・歴史紹介映像製作等の案が委員会内では挙げられているが、評議員および一般会員、地域（千葉県、千葉市住民）の意見を幅広く募りたい。

・事業案に応じて、募金等の資金計画を十分に検討する必要がある。

・メモリアル事業への評議員の参加を促し、本事業を契機として評議員会の進展を図りたい。

祝叙勲

令和元年　春の叙勲

旭日小綬章
田畑陽一郎（昭46）

瑞宝小綬章
竹島　徹（昭41）

瑞宝双光章
牧野　耕治（昭32）

第24回（2019年度）ゐのはな同窓会賞 受賞者決定

功労賞

齋藤　康
（千葉大学名誉教授、新潟大・昭43）
「生活習慣病の病態解明と治療法の開発」

ゐのはな同窓会 卒後50周年基金 への寄附

昭和44年卒クラス会 二百五十万円
ありがとうございました。

紙面紹介

総会開催　1
総会講演会　2～3
ゐのはな同窓会賞　3
就任挨拶　4～10
人事異動　8
各地ゐのはな会　10～12
クラス会　13～15
研修プログラム　16～17
研修医だより　17
追悼文　18
雑文雑談　18～19
著書紹介　19
地区ゐのはな会報　20
会員から　21
学内情報　22～23
千葉大学医学部附属病院　24
課外活動団体だより　25
欧州医学史巡り　26
議事要旨　28～29
オンライン会報　30～31
編集後記　32

ゐのはな同窓会総会

特別講演

誤診学のススメ　～外国人患者編～

千葉大学医学部附属病院　総合診療科
教授　生坂政臣（鳥取大・昭60）

診断学には馴染みがあっても誤診学は聞き慣れない上にネガティブなイメージがあるため、誤診をタイトルに入れた演題は採択されないこともある。しかし、診断した症例から誤診例を差し引けば、残りは正診例となるわけで、認知心理学で診断プロセスが明らかになるにつれ、如何に誤診を回避するかは、如何に誤診を回避するかの方略と同等と考えられるようになった。すなわち診断学と誤診学は表裏の関係にあり、前者は初学者向けの切り口であるのに対して、熟練医はむしろ後者の視点からの学びが大きいため、最近では同じ内容について話すにしても、その普及を目的として診断学より誤診学という名称を用いるようにしている。

誤診学を語る上で外せないのがその頻度である。米国での心臓病とがんに次ぐ第三の死因として医療過誤が2016年に報告されたのはまだ記憶に新しい。毎年25万人の米国人が避けられ得た原因で亡くなっており、そのうち8万人は誤診による被害者だという。年間8万人が亡くなるということは、2日に一度ジャンボ機が墜落している計算になるほどの〝事件〟である。翻ってわが国では、2018年に日本医療機能評価機構が医療事故による死亡例293件を報告しているにすぎない。米国と同じ割合で事故が発生しているとすれば、わが国でも毎年12万人程度亡くなっているはずであり、医療訴訟の頻度の違いなどを勘案しても、国内での報告例があまりに少ない。これには二つ理由が考えられる。ひとつは過ちを犯した個人を責めないno blame文化の未醸成が誤診隠蔽につながっているためであり、もうひとつは誤診そのものに気づいていないためである。前者は当事者が人に言えないくらい猛省しているはずなので救いはあるが、後者は本人が気づいておらず同じ過ちを繰り返してしまう点で、前者よりも大きな問題を孕んでいる。

実は臨床医が自ら下した診断の正否について知るチャンスは意外に少ない。米国の救急医が年間平均5人の見逃し患者を再び診察する機会は10年に1度しかなく、50件中49件の誤診に気づくことができない可能性があると報告されている。特にわが国では患者が自由意志で医療機関を受診できるために、同じ愁訴で複数の医師を受診するドクターショッピングが常態化しており、急変すれば当番制の救急病院に運ばれて、その結末が外来担当医やかかりつけ医に知らされる可能性は、かかりつけ医制度が普及している欧米より低い。これらに加えて医療訴訟の閾値の違いが、わが国での誤診による死亡報告数が米国に比べてはるかに少ない理由と考えられる。したがって、誤診を減らす第一歩は、誤診したことを認識できる仕組みであり、特に医療訴訟が少ないわが国では、転帰を知らせるネットワークができるまで、医師自ら積極的に患者をフォローする姿勢が重要となる。

次に認知心理学の視点では、熟練医の誤診の多くがパターン認識から派生するヒューリスティックバイアスに起因していることが判っている。多忙な診療現場では回避しがたいバイアスであるが、個別のミスではなく、ある医師の落とし穴には他の医師も陥りやすいという共通のピットフォールになっていることが多い。それ故、これらのピットフォールを共有すれば実際の誤診は最小限に抑えることができる。私事で恐縮だが、1997年より前赴任地で担当医が陥ったピットフォールを参加者全員で共有する少人数制の誤診症例カンファレンスを毎日開催し、千葉大学でもその流れを受けて2003年の開設以来毎週欠かさず行っている。ちなみにこのカンファレンスの形式はNHKの「総合診療医Dr．G」のモデルとなった。全米医学アカデミーは、診断を適時に、正確に、確実に伝えることが重要で、これらの要件のうち一つでも欠いた場合を誤診と定義している。このうち、特に適時の定義が難しく、診療の場や専門性、あるいはその時点での医療水準などによって変化してしまう。一般には後医は名医と言われるように、情報量が少ない時点での診断は困難であるが、上記カンファレンスでは敢えて少ない情報で診断（誤診）させ、限られた情報で患者のマネージメントが要求されるプライマリ・ケアの現場に即した推論の再現とその振り返りを心掛けている。

今回は外国人患者を診療する上でのピットフォールになる症例を数例供覧したが、このうち世界に3億人いるヘテロ接合型の鎌状赤血球症、いわゆる鎌状赤血球傾向sickle cell traitは、黒人だけでなくヒスパニックや南アジア人にもみられ、運動誘発性横紋筋融解症などの血栓症を発症するので、来年のオリンピックイヤーに合わせて来日する外国人のスポーツ中、あるいは熱中症に伴う筋クランプとの鑑別にあげるべき疾患と考える。

誤診は決して恥じることではなく、そこに共有と振り返りがあれば、個人および組織の診断能力を飛躍的に向上させる貴重な経験であることを結びの言葉としたい。

講演

スポーツメディクスセンター
スポーツに関わる　全ての人の安全、安心のために

千葉大学国際教養学部
山口智志（平11）

千葉大学医学部附属病院スポーツメディクスセンター（SMC）は、2019年1月4日に発足しました。スポーツに関わりの深い外科系、内科系医師・看護師・事務職員により構成されています。

超高齢社会を迎えた我が国で、スポーツによる健康増進・健康寿命延伸の重要性が高まっており、医療とスポーツの連携がこれまで以上に求められています。また、2020年の東京オリンピック・パラリンピックを控えて千葉県内のスポーツイベントも増加しており、救護医療体制の整備が課題となっています。これらの課題を医療面から包括的に支援するためには、複数の診療科、医療関係者とスポーツ関係者、病院内医療と病院前医療など多職種の連携が必要です。また教育を含めた人材の確保が欠かせません。SMCは、関連機関と連携し、医療とスポーツを連携させる拠点になります。SMCは立ち上がったばかりの組織ですが、以下の業務を計画しています。

自治体・スポーツ団体・医師会への支援

スポーツイベントやスポーツ活動における医療者の派遣、緊急時行動計画の策定など、救護医療体制の整備を包括的に支援します。

医療者向け研修コースの開催

スポーツ現場での専門的な救護医療を提供できる人材を育成するため、研修コースを開催します。

検討会およびワーキンググループの開催、県単位コンソーシアムの開催

千葉県医師会や体育協会、

千葉県総合スポーツセンターなどで構成されるコンソーシアムを開催し、地域スポーツにおけるニーズの吸い上げを行います。

その他、アスリートのみならず地域住民を対象とした医療とスポーツに関する研究を推進していきます。センターに多くの人材が関わることにより新たな業務が生み出され、それらがさらに新たな人材を呼ぶような好循環を作り、センターを持続可能な組織にしていきたいと考えています。ねのはな同窓会会員の先生方のご参加、ご支援を心よりお待ちしております。

ねのはな同窓会賞

『生活習慣病の病態解明と治療法の開発』

―この歳になって褒められて―

齋藤 康（新潟大・昭43）

このたび、ねのはな同窓会賞功労賞をいただくことになり、突然の知らせに驚くとともにうれしい気持ちになりました。この賞に値する仕事をしてきたのかという声が聞こえそうですが「もし評価されることがあるとしたら、それはご指導をいただいた多くの先輩、後輩、同僚の力です」と正直に言えるのがずうずうしいところです。このように言えることも後期高齢者ということに免じてお許しください。

私は、第2次世界大戦のさなか昭和17年に福島で生まれました。終戦という貧困と寒冷地で生きていくことの困難さを、身をもって教えられたところでした。小学校、中学校は勉強をするというよりも〝食べて、生きていく〟ということが第一で、魚を捕ったり、野鳥を捕まえたり、畑を耕したり、農業を手伝ったりして、それが出来ることが学校でも評価だったように思い出されます。

父はその土地で開業する内科医でした。私が中学2年生のとき、「このままで上の学校に進めるのか」という父の一言で、勉強を習えるところに転校させるということになり、市内の中学校に転校しました。それまでの小学校、中学校の8年間分を中学3年の1年間で学ぶというものでした。このような荒療治で高校に進学でき、「田舎の医療をしてもらわんとならん」という父の言葉に従って新潟大学の医学部に進学しました。

小生にとっては大学というところはこんなにも自由で、みんな勝手なことを言う楽しいところだと思いました。教授からの「研究とは自らの世界を語ることだ」という話に感動し、自分もこんな仕事をしたいと思い、他の大学も訪問し素晴らしい先生にお会いすることも出来ました。多くの先生から「君、一緒にやろう」と誘っていただけるというのも心躍る気持ちでした。脂質代謝という研究領域をやりたいという気持ちがあり、徳島大学の先生のところで研究をすることにしました。「人よりも10倍やれば解決策は出てくるよ」と研究初日のニコニコ顔の先生が忘れられません。基礎研究に一区切りができ、30歳で千葉大学の第二内科に呼んでいただき赴任しました。いい同僚に恵まれ脂質代謝に関する臨床研究を続けることが出来ました。亥鼻キャンパスを舞台にいろいろなことをさせていただきました。バレー部の顧問もさせていただき、関連病院の先生方との交流も楽しく出来、教室ではお互いに助け合いながら、お互いの研究成果を学び合い、楽しい時を過ごしました。この頃に新しいコレステロール降下薬を開発することや、酵素欠損症の治療手法として細胞治療の基盤を創ることができ、ヒトへの応用に成功しました。年齢とともに大学をいろいろな視点でみることの大切さを病院長や学長という仕事を通して学ばせていただきました。改めて自らの仕事ではなく多くの方々からのご指導、御支援がそこにあったことを強く感じ、感謝の気持ちを捧げます。

講演

若手育成の取り組みの実績と今後

千葉大学医学部附属病院
千葉県健康福祉部医療整備課
吉村 健佑（平19）

本講演では私より、千葉大学病院と千葉県医療整備課の両方に所属する立場から3つの若手医師育成の取り組みを紹介しました。

1点目は千葉県ねのはな会が中心となって取り組んでいる「次世代リーダー育成海外留学奨学金制度」です。本制度は2015年度から開始し、千葉県ねのはな会の会員有志からの寄付により運営され、これまでに9名の現役医学部学生をハーバード大学大学院に短期留学させた実績を有しています。講演会当日は奨学生9名全員が登壇して同窓会員に対して謝辞と簡単な報告を行いました。本制度が同窓会の事業と位置付けられると、安定運用につながると考えられます。

2点目はこちらも千葉県ねのはな会が支援している「育星塾（いくせいじゅく）」の活動を報告しました。本活動は、三澤園子先生（平11）が代表を務める、次世代を担う若手・中堅医師を対象とした、リーダーシップ、マネジメント、ブランディングなどを勉強する会です。年に4回開催しており、毎回20名ほど、志の高い元気な若手が集まっています。

3点目は千葉県の行っている、「千葉県医師修学資金制度」についての現状を報告しました。現在までに330名を超える奨学生がおり、約半数が千葉大学の学生・卒業生になります。奨学生は医学部卒業後、一般に9年間、県内の病院にて勤務を行い、一定期間は医師不足地域にある医療機関での勤務が必要とされています。現在、奨学生のうち約50名が千葉県内で初期臨床研修を行っており、約40名が県内の各診療科で専門医を取得するための専門研修を行っています。今後、千葉県内での医師の育成においては一定の存在感を示すと予想され、その現状を報告・共有しました。

今回取り上げた3つの取り組みとも、テーマの通り「若手医師の人材育成」に焦点が当てられており、千葉大学医学部やねのはな同窓会の今後の活動とも密に関係してくる内容であり、参加者から高い関心が寄せられたと実感しました。

教授就任挨拶

千葉大学大学院医学研究院
医学教育学　教授
伊藤彰一（平10）

この度、令和元年（2019年）5月1日付で千葉大学大学院医学研究院医学教育学の教授を拝命いたしました。また、平成31年（2019年）4月1日付で、千葉大学医学部附属病院総合医療教育研修センター長を拝命いたしました。

私は、平成10年（1998年）に千葉大学医学部を卒業し、千葉大学神経内科に入局しました。そこで神経内科疾患の一般診療や脳脊髄MRI診断などの研究を行うとともに、学生や研修医などの指導に関心を持ち、臨床実習等の教育実践を行いました。この頃、医学教育の実践や理論が体系化され「医学教育学」として発展し、全国の大学に医学教育を専らとする部署が設置され始めていました。

こういった流れの中で、平成21年（2009年）、当時千葉大学医学部附属病院総合医療教育センターの田邊政裕教授にお声掛けいただき、千葉大学医学部医学教育研究室の講師に着任いたしました。以後、千葉大学の卒前・卒後の医学教育に幅広く関わる機会をいただいております。卒前教育では、診療参加型臨床実習、臨床実習後OSCE、生物学リメディアル教育、メンター制度の導入等に携わり、卒後教育では、臨床研修医のリクルート、内科専門研修プログラムの作成などを行いました。そして、現在に至るまで、卒前・卒後教育の両方に携わる人材である教育専任教員（アテンディング）の育成に努めております。

現在、医学教育を取り囲む状況は絶えず変化しています。卒前教育では、医学部卒業生の能力の質保証が従来以上に求められるようになっています。卒後教育では、2004年度に現在の臨床研修制度が導入されて以後、研修医・医師の地域偏在が顕在化しています。また、2017年度には新しい専門研修制度が導入されましたが未だ制度が安定しておらず、若手医師がキャリア形成に不安を感じています。その他にも、基礎研究医の育成、臨床医の働き方改革など、教育に関連する課題が山積しています。

私は、これらの課題を解決するためには、「学習者中心のアプローチ」が重要だと考えています。当然のことながら学習者の志向は一様ではありません。臨床医を志す人、研究医を志す人、医療行政を志す人など様々な人がいます。各学習者のニーズや準備状況を把握し、それらに対応した教育を提供することが効果的です。また、効率的な学習によって自主的な活動ができる時間を増やすことが、リサーチマインドを高めることや、適正に働くために重要だと考えています。

ゐのはな同窓会には、各分野で素晴らしい業績を上げられた諸先輩方が多数いらっしゃいます。私は、その長い伝統の重みを感じつつ、新しい令和の時代に千葉大学医学部や医学部附属病院、そして千葉県の医療を更に発展させるべく、微力ながら努めて参りたいと存じます。今後ともご指導ご鞭撻のほどお願い申し上げます。

トロント大学　トロント総合病院
呼吸器外科　教授
―トロントでの11年を振り返って―
安福和弘（平4）

平成4年に千葉大学医学部を卒業後、早いもので27年が経ちました。卒業後は肺の手術に魅了され千葉大肺外科に入局しました。その後肺移植に関わる2回の留学を経て、2008年9月よりカナダ、トロント大学Toronto General Hospital（トロント総合病院）呼吸器外科に赴任しました。トロント総合病院はトロント市内にあるトロント大学の中核病院で臨床、研究ともにカナダの中をリードしている病院です。本年のNewsweekの世界の病院の評価順位では世界Top10に選ばれました。特に、臓器移植プログラムは北米で1位の症例数を誇り、臨床のみならず数々のInnovationで有名です。トロント赴任後約11年を経て本年7月よりトロント大学Department of Surgery, Division of Thoracic SurgeryのFull Professorに就任しました。

トロント総合病院呼吸器外科は呼吸器外科医9名および呼吸器内視鏡専門医1名からなる世界でも有数の呼吸器外科教室で、臨床では10名のスタッフのもと数多くの研修医が呼吸器外科のトレーニングに励んでいます。一般呼吸器外科以外にも、トロント肺移植プログラムは臨床・研究ともに世界を常にリードしており、本年は約200例の肺移植を行なってきました。臨床では主に年間1200例以上の呼吸器外科手術がToronto General Hospital（Princess Margaret Hospital）で行われています。一方研究はLatner Thoracic Surgery Research Laboratoriesで各スタッフが独立した研究室を運営しています。

さて、トロントに移動後2009年6月にはInterventional Thoracic Surgery ProgramのDirectorに就任し、2010年にはInterventional Thoracic Surgery Suiteを建設しました。2011年10月にはカナダで初の肺癌症例に対するRobotic lobectomyを成功させ、以来Robotic Thoracic Surgery ProgramをリードしているGTx ProgramのThoracic Surgery Leadとして2012年にGTx（Guided Therapeutic）ORを建設しTranslational Surgical Researchをすすめています。GTx ORは術中Imagingを用いた様々な臨床研究を目的に開発された通常の手術室の約3倍の広さの手術室で各種内視鏡デバイス、ナビゲーションシステム、CT scan、Cone Beam CTなどを搭載した癌専門の手術室です。また2016年にUniversity Health Networkの内視鏡部部長（Director of Endoscopy）に就任し、2017年には70名以上の腫瘍外科医が在籍するSurgical OncologyのDeputy Headに就任しました。病院内の管理的な仕事が増えましたが、研究も頑張って続けております。研究面では肺癌を中心としたTranslational Researchを行なっております。我々の研究室独自のプロジェクトのみならず、各企業との共同研究プロジェクトも多く展開しています。数多くの研究員、留学生の努力の結果、過去5年間だけでも約8億円の研究費を確保し、過去11年間で180編以上の論文も発表してきました。留学生はイスラエル、韓国、台湾、ブラジル、アメリカ、日本（高知大学、熊本大学、北海道大学、慶應義塾大学等）世界各国から集まって来ています。今後も医療・工学の融和を図った研究を続け、更なる医療発展に励むとともに、若い世代の育成にも尽力して行きたいと思っております。

国際医療福祉大学医学部

呼吸器内科学　教授

多田　裕司（岡山大・平4）

平成31年4月付で、国際医療福祉大学医学部呼吸器内科学の教授を拝命いたしました。

私は岡山大学卒業（平成4年）ですが、卒後は千葉大学小児科で1年研修後、がんや救急、呼吸管理に興味が転じ、栗山喬之名誉教授の呼吸器内科の門を叩き、入局を快諾して頂きました。研修は千葉労災病院、東松戸病院、千葉東病院にて、救急から終末期まで呼吸器診療を叩き込まれました。大学院は学外の空気を吸ってみたいという希望を通して頂き、千葉県がんセンター細胞治療開発研究部（田川雅敏部長）で、がんの免疫療法と遺伝子治療に関する研究を、基礎からみっちり叩き込まれました。田川先生はこと研究に関しては厳格で、「一切の妥協を許さず」という考えを貫いておられたので、のんびりした性格の私は苦労しましたが、手を抜かずきっちり仕事をする習慣が身につきました。がん免疫の研究は大変興味深く（残念ながら今をときめくPDL1ではなかったのですが）、CD28、CD40やFasLを強制発現させたがん細胞の移植実験や、樹状細胞との関連など、業績や論文云々よりも好き勝手に実験しており、「いい加減に結果をまとめるように！」と何度も注意喚起されていたと思います。当時、手取り足取り実験を教えて下さった王継揚先生（現、復旦大学教授）には今でもinspireされています。

大学院卒後は栗山教授のご推薦で、米国コロラド大学デンバー校にポスドク留学しました。コロラド大学は呼吸器領域では米国で屈指の施設で、Ig-Eを発見された石坂公成先生の小児喘息研究所（現National Jewish研究所）とは目と鼻の先で関係も深く、そこに留学されていた先生方とも懇意にさせて頂きました。私の所属先はDavid Rodman教授率いる肺高血圧研究所で、当時のデンバーはその領域で世界のトップを走っており、大変活気がありました。研究課題は、特発性肺動脈性肺高血圧症の原因遺伝子として、同定されたばかりのBMPR2遺伝子の動物モデルの作成と、表現型、薬効の解析でした。2年間と短かったものの主任研究者のJames West先生（現Vanderbilt大学教授）とは今でも共同研究者の付き合いです。帰国後はJCHO千葉病院を経て千葉大学に異動し、病棟医長、医局長、教育主任を歴任しました。大学院生の指導とマネージメント・臨床・研究を同時進行でこなさなくてはならず、余裕はありませんでした。しかし巽浩一郎教授の寛大なバックアップと、田川部長の綿密な研究計画、東京女子医科大学の廣島健三前教授、東邦大学外科の島田英昭教授、千葉大学腫瘍内科の滝口裕一教授の強力なサポートもあり、「NK4遺伝子発現型アデノウィルスベクターを用いた胸膜中皮腫の臨床試験」を完遂できました。手作り感満載のFirst in Humanの臨床試験で、治験とは異なる苦労もありましたが、経験値はかなり上がりました。大学の優秀な病棟医、大学院生も協力的に関わってくれ、マンパワーと医局のありがたみを実感しました。寛大なご判断を下さった巽教授には心から感謝しております。

私は縁あって来春に成田に開院する国際医療福祉大学で新たな人生を歩みます。授業カリキュラムは厳しく、1年生から自主勉強会を開くなど、学生のモチベーションは高いです。特に海外からの奨学生は、国を背負う意識が強く、学力的のみならず、対人関係も礼儀正しく、「見習うべきことが多い」と関係者から聞きます。こちらも気を引き締めて彼らの期待に応えなくてはなりません。今後10年、千葉の地域医療を支え、千葉大学にも協力し、一方で国際医療福祉大の卒業生が立派な医療人として自国で活躍するのを小さな国際貢献と考え、もうひと頑張りできそうです。最後に千葉大学ゐのはな同窓会のさらなる発展を祈念して、私の雑文を終わらせて頂きたいと思います。

ゐのはな同窓会賞受賞候補者募集要項

第二五回（二〇二〇年度）ゐのはな同窓会賞の受賞候補者を左記により募集いたします。

一、**受賞対象者**

①**社会貢献賞**　本会員で、医療活動の顕著な業績により、社会に高い貢献をした個人またはグループ。

②**功　労　賞**　医学および広く文化の各領域において、千葉大学および千葉大学ゐのはな同窓会に多大の貢献をした者。

二、**表　彰**

①**社会貢献賞**（三件以内）盾および賞金（総額三十万円以内）を贈呈します。

②**功　労　賞**（一件以内）盾および賞金十万円を贈呈します。

三、**応募方法**

所定の申請用紙により、二〇一九年十二月一日から二〇二〇年一月三十一日までに申請して下さい。

四、**受賞者の決定**

選考委員、常任理事会の議を経て、会長が行います。

審査結果は二〇二〇年五月中頃までに各申請者に通知すると共に、ゐのはな同窓会報に掲載します。

五、**問い合わせおよび申請用紙請求先**

千葉大学医学部内、ゐのはな同窓会事務室

申請用紙は同窓会ホームページよりダウンロードすることが出来ます。

第249回　生理学東京談話会のお知らせ（第一報）

第249回生理学東京談話会を下記の通り開催致します。一般演題を募集しますので多数の方々（特に若手研究者や大学院生）のご参加とご発表をお待ちしております。

【日　　時】 2019年11月30日（土）　13：00～17：00（予定）

【会　　場】 千葉大学亥鼻キャンパス　ゐのはな同窓会館
千葉市中央区亥鼻1－8－1
（アクセス：JR千葉駅又は京成千葉線の京成千葉駅下車、(7) 番バス乗り場から京成バスを利用15分、「千葉大医学部入口」下車徒歩1分）
http://www.m.chiba-u.ac.jp/about/access.html/

【特別講演】 演者：千葉大学大学院医学研究院代謝生理学
教授　三木　隆司
講演タイトル：
「**腸内分泌細胞における糖感知の分子機構（仮）**」

【演題及び抄録締切】
2019年10月25日（金）
（抄録の様式などの詳細は追って後日ご案内致します）

【参 加 費】 無料

【当番幹事】 千葉大学大学院医学研究院薬理学　教授　安西　尚彦

【共　　催】 千葉大学大学院医学研究院代謝生理学　教授　三木　隆司
千葉大学大学院医学研究院認知行動生理学
教授　清水　栄司

【連 絡 先】 第249回生理学東京談話会　事務局　霊園、北村
（千葉大学大学院医学研究院薬理学　内）
〒260-8670　千葉市中央区亥鼻1－8－1
電話：043－226－2052　FAX：043－226－2052
e-mail：danwa249@gmail.com

談話会終了後、懇親会を予定しております。奮ってご参加下さい。

東邦大学医学部
外科学講座乳腺内分泌分野　教授
榊原雅裕（金沢大・平6）

平成30年11月1日に東邦大学医学部外科学講座乳腺内分泌分野教授（佐倉病院勤務）を拝命致しましたので御報告させていただきます。私は平成6年に金沢大学医学部を卒業し、同年千葉大学医学部附属病院第一外科（現臓器制御外科）に入局させていただきました。当時の第一外科教授中島伸之先生の御指導のもとで医師としての第一歩を踏み出しました。

第一外科およびその関連施設での5年間の一般外科の初期研修を終えた後、千葉大学医学部附属病院に戻り、専門分野として乳腺甲状腺外科を選び、当時の乳腺甲状腺外科主任の鈴木正人先生（現国立病院機構千葉医療センターブレストセンター長）に御指導をいただきました。また同時に大学院では、当時の遺伝子制御学において齊藤隆教授（現国立研究開発法人理化学研究所生命医学研究センターチームリーダー）に御指導をいただき、T細胞活性化の制御をテーマとして研究を行いました。齊藤隆先生の持つ研究者としての豊かなエネルギーと創造性に深く感銘したのを今でもよく記憶しております。大学院時代のすばらしい勉強は、研究者としての私のすべての基礎となっております。

大学院を終了した頃、第一外科は臓器制御外科と名前を変えており、宮崎勝教授が就任されていました。平成16年4月に宮崎勝先生の下で乳腺甲状腺外科助手となりました。乳腺甲状腺外科主任の長嶋健先生（現千葉大学医学部附属病院手術部長およびブレストセンター長）に御指導を仰ぎ、多くの大学院生達とともに、乳癌の臨床研究と基礎研究に傾注致しました。特に、宮崎勝先生から専門分野を超えて乳癌の臨床研究に多くの御指導をいただけたことが私の幸運でした。

平成28年11月には千葉大学医学部附属病院よりサバティカル研修を取得し、米国シンシナティ大学メディカルセンターおよび韓国サムスンメディカルセンターに約6ヶ月の臨床留学をさせていただきました。平成29年10月に栃木県にある国際医療福祉大学病院講師となりました。その後の平成30年11月に、東邦大学医学部外科学講座主任教授の岡住慎一先生（元千葉大学医学部附属病院先端応用外科）の御高配により現職となりました。

東邦大学では次世代の乳腺外科医、特に女性医師を多く育ててゆきたいと考えております。千葉大学医学部附属病院時代の女性大学院生の指導を通して、その問題点を学び、さらに米国での臨床留学では、男性医師と女性医師の科ごとの縦割りを知り、乳腺外科は女性医師の活躍の場であることを改めて深く自覚致しました。東邦大学医学部は、旧制の帝国女子医学専門学校にその起源を持つことから女性医師の伝統が深く、女性医師問題にいち早く取り組んできました（ダイバーシティ推進センター）。これらの東邦大学の背景は、私の目指す新しい乳腺外科の大きな後盾となると信じております。

最後に、これまで御指導いただいた千葉大学医学部、附属病院そしてその関連施設の多くの先生方に感謝し、その御恩は千葉県における乳癌医療と乳腺外科医育成に還元させていただきます。今後ともご指導ご鞭撻を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

東京医科大学
臨床検査医学分野　主任教授
木内　英（平11）

本年4月より、東京医科大学の臨床検査医学分野の主任教授を拝命いたしました、木内（きない）と申します。私は1990年に慶應義塾大学経済学部を卒業、海外経済協力基金（現　国際協力機構：JICA）に入職、中国におけるダムや港湾などの建設プロジェクトの審査や案件管理を担当していました。1999年（平成11年）に千葉大学医学部を卒業、慶応大学病院小児科学教室に入局後は、荻窪病院に7年、国際医療研究センター：エイズ治療・研究開発センターに8年在籍し、血友病とHIV感染症の治療と研究に没頭してきました。多くの諸先輩方のご縁と導きにより、今回このような重責を拝命することとなり、日々身が引き締まる思いです。

東京医科大学の臨床検査医学科は、シカゴ大学小児科助教授だった加藤勝治先生が、米国式医学の導入のために1946年に本学医学研究所長に就任したことから始まります。1951年に血友病など血液凝固異常症を専門とする血液学教室を開設、さらに同年に国内の大学病院としては初めて中央検査部と血液銀行（輸血部）を設立しました。1980年代に血友病患者さんに薬害エイズが発生すると、HIV感染症の治療と研究も開始し、現在では国内第3位の患者数を誇ります。こうして、血液凝固異常症とHIV、臨床検査、輸血を専門とするユニークな診療科となりました。それだけに全ての領域を網羅できる人材は少なく、私も全てに精通しているわけではありませんが、常に新しい問題に果敢に取り組んできた先達のパイオニア精神を胸に、それぞれが得意分野を生かしています。

かつて死の病と言われたHIVも、治療薬の飛躍的な進歩により、慢性疾患となりました。しかし、薬をやめるとすぐにウイルスが増殖するため、治療の長期化と患者の高齢化、急速に増大する医療費負担が世界中で問題となっています。こうした中、治療薬を予防的に使う試みや、薬を飲まなくてもHIVが増殖しない「治癒」の研究が本格化しています。血友病は1980年代の薬害の反省から、以後30年ほどは安全な血液製剤の開発が行われてきましたが、予防的な血液製剤輸注の普及から患者さんのより活動的な生活を求める声が高まり、半減期延長型製剤や皮下注射型の二重特異性抗体など、より利便性の高い製剤が相次いで登場し、今後数年で遺伝子治療も本格化します。こうした創薬のスピードに臨床現場や研究が追い付いていない現状があります。このような激変期を迎えるにあたって、臨床検査医学科も時代に対応するべく、診療と研究の体制を整えてまいります。

千葉大卒の諸先輩方の錚々たる経歴に比べますと、まだまだ未熟者ですが、医科学の発展に少しでも貢献できるように努力してまいります。今後ともどうぞご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

令和元年度総会において選出された名誉会員

石川　正士　氏（昭32）　浅野　尚　氏（昭38）
忍頂寺紀彰　氏（昭42）　織田　成人　氏（昭53）

千葉県立保健医療大学
健康科学部リハビリテーション学科
作業療法学専攻　教授
山本達也（平13）

この度、2019年4月1日付で、千葉県立保健医療大学健康科学部リハビリテーション学科作業療法学専攻教授に就任いたしました。

私は2001年3月に千葉大学医学部を卒業しました。その後、千葉大学神経内科に入局いたしました。入局後は服部孝道教授、榊原隆次先生（現東邦大学医療センター佐倉病院脳神経内科教授）、内山智之先生（現国際医療福祉大学脳神経内科教授）のご指導のもと、神経因性膀胱の研究を始めました。膀胱や尿道などの下部尿路は主に自律神経により支配されていますが、脳、脊髄、末梢神経のどこかが障害されると排尿障害を呈します。脳神経内科の臨床を行っていくうえで神経疾患における排尿障害というのは極めて重要なテーマなのですが、国内外を見渡しても脳神経内科医が中心となって神経因性膀胱の研究を行っている施設は少なく、千葉大学において神経因性膀胱の臨床・研究に関われたことを大変誇りに思っております。

臨床では、パーキンソン病や多系統萎縮症などの神経変性疾患の排尿障害について質問表や尿流動態検査を用いて、病態の解明を行いました。尿流動態検査はカテーテルを膀胱内に挿入し、膀胱内圧と尿流を測定することで排尿障害の詳細な病態がわかる検査であり、千葉大学では泌尿器科医と脳神経内科医が共同で行っています。このような検査体制は全国的にみても珍しいと思います。現在、この分野で世界的に活躍されている榊原隆次先生の強力なリーダーシップのもと、多数の学会発表、論文発表を行うことができました。

動物を用いた基礎研究にも関わらせていただきました。排尿は随意的に調節することができますので、脳内には下部尿路の調節に関わっている部位（高位排尿中枢）が多数あります。私はネコやラットを用いて、高位排尿中枢の電気生理学的検討、神経伝達物質の測定を行い、高位排尿中枢の作用メカニズム解明に努めました。

2008年に現在の桑原聡教授が就任され、神経因性膀胱の研究に加えパーキンソン病における脳深部刺激療法の臨床にも関わらせていただきました。パーキンソン病は進行すると、運動合併症が出現し内服薬のみでの調節が困難になる場合があります。そのような患者さんに脳深部刺激療法を行いますと、運動合併症が著明に改善いたします。パーキンソン病の脳深部刺激療法につきましては樋口佳則先生（千葉大学脳神経外科准教授）、内山智之先生のご指導のもと、術後における臨床症状の経時的変化、運動症状以外の非運動症状（認知機能や自律神経症状）の臨床研究を行いました。

本年4月より赴任した千葉県立保健医療大学では、主に理学療法士、作業療法士を目指す学生さんを対象に脳神経内科学を中心とした臨床医学の教育を行っております。近年、高齢化が進みリハビリテーションの重要性はますます高まっていくと思われます。リハビリテーションを行う上で、基本的な臨床医学の知識は必要不可欠でありますので、十分な臨床医学的バックグラウンドを持った理学療法士、作業療法士の育成・教育に力を注ぎたいと考えております。また、本学は千葉大学出身の先生方が多数在籍しており、千葉大学の近くに立地しておりますので、千葉大学とうまく連携をとりながら、教育・研究を進めたいと考えております。

今後とも、ご指導ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。

東京女子医科大学八千代医療センター
小児科　教授
濱田洋通（平2）

この度、東京女子医科大学八千代医療センター小児科教授を拝命いたしました。私は6年生で当時の中島博徳小児科学教授の最終講義を聴いた学年です。千葉大学小児科学教室に入局し新美仁男教授の自由闊達な教室で臨床研修を行い、河野陽一教授に学位指導を頂きました。河野先生にはポストドクとなった際に4階の小児科学教授室で「君はまだ基礎的素養が足りない」と言われ、その足で5階の古関明彦・高次機能研発生生物学教授（現・理化学研究所）に会って紹介してくださったのを記憶しています。その後も河野先生の勧めで留学を志し、タフツ大学循環器内科（ボストン）で心血管再生のトランスレーショナルリサーチに関わる機会を得ました。約10年にわたる心血管組織の基礎・臨床研究のキャリアは私の大学人としての礎となっています。

2006年末に帰国後、千葉大学医学部附属病院小児科循環器班の上司で公私ともにお世話になった寺井勝先生が教授として赴任された八千代医療センターに入職し、以来13年になります。今回の昇任では後任の高梨潤一教授（昭63、同門）、杉原茂孝女子医科大学東医療センター小児科教授（昭55、同門）に後押しを頂きました。501床に成長したセンターは、122床がNICU含めた小児病床です。小児4科の部門長として高梨教授が、私は74床の小児科の責任者をしています。

八千代では小児の血管炎である川崎病の治療として免疫抑制薬の新規開発に取り組んできました。羽田明前教授（公衆衛生学）、花岡英紀教授（臨床試験部）の下で実働部隊として尾内善広准教授（公衆衛生学）らと共に働いてきました。下条直樹小児病態学教授の協力も頂き、臨床試験では35％の患者さんが千葉県から参加してくださいました。羽田教授の最終講義にあわせて成果はLancet誌に公表され、薬事承認の目前まで来ています。国際誌の査読やガイドライン委員、川崎病学会の運営にも関わらせて頂くようになり、この分野でリーダーシップをとっていこうと思っています。臨床では千葉北西部の小児救急の核となるべく努力してきました。現在の課題は働き方改革をしながら良質な1－3次小児医療を維持してゆく体制づくりです。救命され、後遺症を遺したお子さんの療養や在宅医療の千葉県内のシステム作りも課題です。東京に比し千葉県はリソースが圧倒的に少ない状況です。小児科学会小児救急委員会、千葉県小児科医会救急担当理事として取り組んでいます。最後に教育ですが、八千代で将来の小児医療を担う人材は確実に育ってきています。千葉出身の方も多いです。近い将来、県内の小児医療で活躍してくれると確信しています。

同窓の皆様、八千代医療センター出身の医療者を暖かくご指導ご支援いただきたいと思います。千葉大との共同研究を一層発展させ、千葉発の小児医学の成果を世界に発信したいと考えています。どうかよろしくお願いいたします。

日本大学医学部
内科学系消化器肝臓内科学分野　診療教授
神田　達郎（新潟大・平3）

平成31年4月1日付けで日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野診療教授を拝命いたしました。私は平成3年に新潟大学医学部を卒業後、木更津高校出身であり、木更津で高校まで過ごした関係で、将来は地域医療の担い手になろうと考え、千葉大学第一内科に入局し初期研修を開始しました。その後千葉労災病院、千葉県立鶴舞病院、キッコーマン総合病院など関連病院で臨床研修を行いました。それぞれの病院で故岩間章介先生、畦元亮作先生、三上繁先生他同門・同窓の先生方には大変お世話になりました。

平成7年に当時同じ木更津高校出身の横須賀收講師（前医学部長）の主宰する第2研究室で肝炎ウイルス、肝臓病研究をさせていただくことになりました。当時はB型肝炎に対する核酸アナログ製剤も臨床使用できず、C型肝炎に対する治療も標準型インターフェロンの週3回注射のみという時代でした。劇症肝炎患者も数多く、救急部・集中治療部において当時の平澤博之教授、菅井桂雄助教授、織田成人講師（現名誉教授）をはじめとする諸先生方には大変お世話になりました。また当時の東京大学医学部第二内科小俣政男教授にもご指導いただきました。小俣先生には現在もアジア太平洋肝臓学会（APASL）のC型肝炎ガイドライン作成委員に加えていただき、ご指導を受けております。大学院は「非A-E型劇症肝炎にGBV-Cという新たなウイルスは関与せず」というHepatologyにPublishした論文で卒業させていただき、当時の税所宏光教授より学位をいただきました。大学院3年生の間は鹿島労災病院に出張し、斉藤正明先生他諸先生方にお世話になりました。平成12年12月1日からは千葉大学保健管理センター（現千葉大学総合安全衛生管理機構）助手となり、当時の長尾啓一センター長に産業医活動等もご指導いただきながら、千葉大学大学院医学研究院腫瘍内科第2研究室で研究・診療・教育を続けました。

その後平成17年から20年まで米国ミズーリ州Saint Louis大学病理学教室へ留学し、ウイルス学、免疫学、癌研究をさせていただきました。私がお世話になったRatna Ray教授、Ranjit Ray教授の下、肝発癌、ワクチン研究、C型肝炎ウイルスに対するDirect-acting Antiviralsスクリーニングなどの研究を行いました。英語で研究に関しディスカッションを行い、データを出し、論文を書くというトレーニングを受けたことは非常に良い経験でした。

平成20年に帰国後同年12月1日より千葉大学大学院医学研究院腫瘍内科／消化器・腎臓内科に戻り、横須賀收教授にテニュアトラック特任講師、医局長、講師として、今関文夫先生（前千葉大学総合安全衛生管理機構・機構長）、白澤浩先生（分子ウイルス学教授）ご指導の下に、中本普吾先生、呉霜先生、安井伸先生、宮村達雄先生、中村昌人先生、佐々木玲奈先生、芳賀祐規先生ほか多数の大学院生、海外からの留学生の先生方と共に肝線維化・消化器発癌・肝免疫などに関する研究・肝臓臨床・教育を継続できたことも非常に良い経験でした。

平成29年7月1日には千葉大学大学院医学研究院消化器内科准教授にしていただきました。横須賀收名誉教授および加藤直也教授にご相談し、同年8月1日より森山光彦主任教授の主宰する日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野へ異動するご許可をいただき、同准教授にて異動致しました。日本大学医学部内科学系消化器肝臓内科学分野は肝臓病研究で昔から有名であり、東京池袋近郊の板橋区大山にあります。日本大学医学部附属板橋病院消化器・肝臓内科には、肝臓病患者が多く集まっています。異動後も千葉大学時代から行っていた次世代シークエンサーや肝細胞、肝星細胞等を用いた肝臓・消化器分野における基礎・臨床研究に加え、高齢消化器病、微量元素研究といった新しい研究分野に手を広げております。今後とも諸先輩方、ゐのはな同窓会の方々にご指導、ご鞭撻をいただきながら肝臓病患者撲滅を目指して、全力で頑張っていこうと考えております。何卒よろしくお願い申し上げます。

人事異動

教授

医学教育学
伊藤　彰一（平10）
（医学教育研究室講師より）

准教授

内分泌代謝・血液・老年内科学
小野　啓（東大医・平7）
（同講師より）

病理部
松坂　恵介（広島大・平16）
（分子腫瘍学講師より）

講師

眼科
横内　裕敬（平13）
（同助教より）

他大学教授

カナダ・トロント大学
呼吸器外科
安福　和弘（平4）

千葉県立保健医療大学
健康科学部リハビリテーション学科作業療法学
山本　達也（平13）

東京女子医科大学八千代医療センター
小児科
濱田　洋通（平2）

日本大学医学部
内科学系消化器肝臓内科学分野
神田　達郎（新潟大・平3）

病院長

千葉医療センター
斎藤　幸雄（昭57）

千葉県佐原病院
露口　利夫（昭59）

病院長就任挨拶

城東桐和会　タムス浦安病院

千葉大学病院浦安リハビリテーション教育センター併設

院長　河野陽一（昭48）

本年２０１９年３月末をもって労働者健康安全機構千葉ろうさい病院を退職し、４月１日付けで城東桐和会タムス浦安病院の院長に就任しました。

私は１９７３年（昭和48年）に千葉大学医学部を卒業後小児科学教室（久保政次教授）に入局し、小児科研修を千葉大学および関連病院で行なった後に免疫学教室（多田富雄教授）の大学院に進みました。大学院修了後米国ＮＩＨでの留学を経て、千葉大学の小児科に戻り、免疫・アレルギー学の分野の診療・研究に従事し、１９９８年からは小児病態学の教授を務めさせて頂きました。２０１３年に千葉大学を退任後千葉ろうさい病院の院長を務めておりましたが、「千葉大学病院浦安リハビリテーション教育センター」を併設したタムス浦安病院の開院にともない、この４月からはタムス浦安病院の運営に取り組んでおります。

タムス浦安病院は、回復期リハビリテーション病棟１３４床、緩和ケア病棟21床、地域包括ケア病棟45床の２００床で構成されており、今後ニーズが増えると予測される急性期以降の回復期から慢性期の医療を担う病院です。タムス浦安病院の最も大きな特徴は、千葉大学（先進的医療の実現、専門医の育成）そして浦安市（医療・福祉体制等への支援）とタムスグループ・城東桐和会（良質な医療の実施、人材育成・臨床研究への支援）の三者が連携した運営にあります。このような全く新しい連携体制は、回復期・慢性期医療の充実を進めていた浦安市が、２０１５年に千葉大学と包括的連携協定を締結し、続いて病院事業者として城東桐和会（岡本和久理事長、平２）が指名されたことによります。民間の医療法人と国立大学病院が連携することは、わが国で初めての試みであり、全国的にも大変注目されています。

「千葉大学病院浦安リハビリテーション教育センター」のセンター長には、千葉大学病院整形外科の大鳥精司教授にご就任いただき、千葉大学からは特任教員が配置されております（飯塚正之特任教授、昭63、山中義崇特任教授、平15）。このように千葉大学病院と直結することにより、大学病院での先端的な知見を活用し、リハビリテーション医療に関わる医師の育成、新たな回復期医療の開発など、千葉県の急性期以降の医療において中心的な役割を果たしていくことが、タムス浦安病院の重要なミッションになっています。また、浦安市と連携することは、タムス浦安病院の地域医療における役割を考えますと、大変重要な結びつきと言えます。

千葉大学と共に回復期・慢性期医療を担う人材の育成および地域医療に取り組む機会を得ましたことは、千葉大学出身の私にとりまして大変光栄なことであり、回復期・慢性期医療の充実と発展に力を尽くしてまいります。ゐのはな同窓会の皆様には、今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

千葉ろうさい病院

院長　岡本美孝（秋田大・昭54）

本年４月１日から千葉ろうさい病院の院長に就任いたしました。千葉ろうさい病院は市原市、並びに千葉市南部を含む周辺地域の患者さんを対象として、現在、手術室での手術実施は年間約５０００名、年間４０００名以上の救急搬送患者さんの受け入れを行っており、この地域の高度な医療、救急医療、災害時の治療の中心的な役割を担う病院として期待されています。また、がん診療連携拠点病院として手術治療のみでなく、通院治療、治療と就労の両立支援、さらに、専門のスタッフが電話や面接相談を行う認知症疾患医療センターを設置し、訪問介護も開始して地域の医療の向上を図っています。市原市は千葉市より人口の減少、高齢化がさらに進んでいます。千葉ろうさい病院の地域の様々な疾患に対する役割は今後益々大きなものになると考えられます。

県内の病院の中で、あるいは全国の労災病院の中でも千葉ろうさい病院は、小回りが利きながら、かつ高度な医療が提供でき、さらに健全な運営を進めている病院として注目されています。前病院長の河野陽一先生が、築いてこられました病院運営を踏襲しながら、地域の医療への貢献、労災病院の職員の勤務環境のさらなる向上に向けて全力で取り組んでまいりたいと考えております。

また、直接病院の運営とは関連はしませんが、これまで千葉大学在任中に進めてきました頭頸部がんの免疫細胞療法について海外での臨床試験、治験を目指した活動を進め、アレルギーの診療、新規治療開発についても国の各種委員会などへの参加や研究の橋渡しを介して、外から千葉大学のサポートをしながら、これまで自分が取り組んだ研究の発展を見守っていければと思っています。今後ともご会員の皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。

千葉県立佐原病院

院長　露口利夫（昭59）

私は前任の千葉大学病院内視鏡センターから平成31年４月に県立佐原病院院長に就任いたしました。佐原病院の立地する香取市佐原地域は、北総の小江戸と呼ばれる歴史的景観を有する水郷の町並みと全国にある香取神社の総本社である香取神宮で有名な由緒ある地方都市です。ＪＲ佐原駅から佐原病院への道筋となる小野川周囲には江戸の情緒を残す町並みと水運で栄えた川沿いの風情が相俟って素晴らしい景観を呈しています。当院はこの香取地域の中核病院として昭和30年に67床で開設、平成８年には新館が完成し災害拠点病院の指定を受け、現在は２４１床となっています。香取地域は大都市圏よりも少子高齢化が急激に進んでおり、この地域の医療は将来の本邦における超高齢化社会の先駆けモデルといえます。そのため当院は急性期医療だけでなく在宅医療支援までを一貫して行える地域医療基幹病院への転換をはかっています。当院のスローガンは、「ときどき入院、ほぼ在宅」であり、急性期医療後の自宅退院を円滑にできるよう訪問看護支援に積極的に取り組んでいます。平成28年に訪問看護ステーションならびに地域包括ケア病棟が開設され、高齢患者支援だけでなく癌の終末期医療などにも対応しています。地域最大の看護ステーションであり、24時間対応できることから地元クリニックからの要請も増えています。その活動成果は全国紙にも大きく取り

上げられるなど注目を浴びています。

当院は地域の救急医療だけでなく基幹病院としての役割を期待され、多数の常勤医が在籍していた平成20年代前半までは脳神経外科による急性期医療や先進的な消化器癌治療も行ってまいりました。しかし、研修医制度改革や大都市圏への医師偏在により常勤医不足となった今では全ての疾病に対応することはできません。そこで周辺地域の基幹病院である旭中央病院や成田赤十字病院と連携をはかり、当院で対応できない重症疾患や専門外領域疾患をお願いするようにしています。

公立病院として地域医療ニーズに応えながら医業収益を改善しなければならず、さらに今年度は診療を継続しながら耐震改修工事を行う予定です。病院経営上前途多難の状況ですが、職員一同一丸となって対処する所存です。ゐのはな同窓会の諸先生方におかれましては今後ともご指導、ご鞭撻の程どうぞよろしくお願い致します。

各地ゐのはなだより

地区ゐのはな会　新会長

神奈川ゐのはな会

西川　哲男（昭47）

栃木県ゐのはな会

平成30年度栃木県ゐのはな会総会が平成31年1月27日（日）午後2時より、例年通り宇都宮市のホテルニューイタヤで開かれた。今回は十川康弘新会長にとって初の総会であった。出席者は済陽高穂（わたようたかほ）ゐのはな同窓会会長、石川詔雄茨城ゐのはな会会長、千葉大学大学院医学研究院泌尿器科学教授市川智彦先生と当会員22名を含め、計25名で例年より少なめであった。総会に先立ち、物故会員3名（芳賀士郎先生、糸井久雄先生、水沼三郎先生）に黙祷が捧げられた。

総会では会長挨拶、会計報告、監査報告の後、布川武男先生の叙勲（瑞宝双光章）受賞が伝えられ、また新任教授2名の紹介があった。自治医科大学消化器・一般外科兼メディカルシュミレーションセンター教授川平洋先生、獨協医科大学医学部生理学主任教授神作憲司先生である。さらに国際医療福祉大学医学部（成田キャンパス）の産婦人科教授田中宏一先生が医学部附属病院開院まで大田原の那須塩原病院で働くことになったと紹介があった。本会事務局の移動に伴い会則の一部改訂が行われ、承認された。大井利夫先生からはゐのはな同窓会の現状が報告された。引き続き講演会に移り、新教授から挨拶を兼ねた講演が行われた。神作先生からは『脳情報の利用に向けて』、川平先生からは『外科医のアイデアから生まれる医療機器開発』が、その仕事の内容を放映されたTVのビデオを交え行われ、新鮮で迫力あり、若い息吹が感じられた。

神作先生はロボットアームの開発を、川平先生はウエアラブル機器による身体支援等を話され、いずれも医工連携に基づく研究であると理解した。

市川教授は『前立腺癌の話題』をレクチャーし、今後手術療法ではda Vinciシステムが主流になると述べた。さらに千葉大学の近況に触れた。

懇親会では、元会長の坂田早苗先生の乾杯の後、布川先生より叙勲受章報告があった。「ただ校医を長年続けただけです」という先生の言葉に謙虚な人柄が滲み出ていた。

済陽、石川両会長の来賓挨拶があり、会は和気藹々の内に進み、紅一点、新会員で獨協医大排泄機能センターの布施美樹先生が挨拶し、山西友典教授主宰の同センターの充実ぶりが伝わった。獨協医大産婦人科教授深澤一雄先生は同医大稲葉憲之先生が学長を辞職された経緯を話され、一同突然の話に驚いた。本会に毎回出席される本田陸人先生の中締めにより閉会した。

写真右から

前列：矢澤卓也（筑波大・昭63）、布川武男（昭32）、大井利夫（昭35）、市川智彦（昭59）、十川康弘（昭55）、済陽高穂（昭45）、坂田早苗（昭34）、石川詔雄（昭47）、川平洋（平4）、神作憲司（平7）

中列：金水英俊（平8）、本多陸人（昭42）、布施美樹（山形大・平16）、石塚満（平3）、足立武則（昭56）、高原正信（昭57）、斎藤弘司（昭43）、長井千輔（昭50）

後列：森本直樹（平3）、須田啓一（昭52）、矢作龍二（昭59）、戸邉豊総（旭川医大・平元）、小池正造（昭53）、廣田勝太郎（昭55）、深澤一雄（昭55）

（廣田勝太郎）

開催予定の行事をお知らせ下さい

学会、研究集会、ゐのはな会、クラス会など種々の行事開催予定とその内容について、同窓会事務局へお知らせ下さい。本会報に掲載いたします。なお、本会報の発行月は1月、5月および9月です。

サノフィは、ヘルスジャーニー・パートナーとして、
私たちを必要とする人々に寄り添い支えます。

サノフィ株式会社
〒163-1488 東京都新宿区西新宿三丁目20番2号 東京オペラシティタワー　www.sanofi.co.jp

SANOFI

東京ゐのはな会

令和元年（２０１９年）６月22日（土）に東京ゐのはな会総会が銀座アスターお茶の水賓館にて開催された。若手の先生が出席しやすいように卒業後10年未満の先生、学生は会費免除としている。本総会から東京ゐのはな会の事務局が、西台クリニックから桐和会本部に移行したことが報告された。さらに、全国総会の決定事項のうち、医学部の新棟移転に伴い、医学部棟（旧病院）の各講座の歴史的物品を展示・保存するため発足したメモリアル事業委員会の報告と亥鼻祭同時開催のhome coming partyに関する報告がなされた。その他、各部報告、役員改選などの協議、監査報告が行われ、会長、副会長、理事、監事の留任が承認された。

特別講演としてお二人の先生をお招きし、有意義なお話しを拝聴することができた。東京医科大学臨床検査医学分野教授になられた直後の木内英先生（平11）から「ＨＩＶと血友病治療の取り組みと展望」というテーマで、ＨＩＶ治療の限界と血友病治療の最新の話題について伺うことができた。お二人目の特別講演として理化学研究所生命医科学研究センター粘膜システム研究チーム教授の大野博司先生（昭58）からは「腸内細菌叢研究の最近の展開」というテーマでご講演をいただいた。最新のトピックスである腸管免疫に関する業績を判りやすく解説していただいた。会員一同、各先生にとって専門領域であるなしに関わらず、新進気鋭の二人の先生から最新の研究成果を拝聴することができた。会員一同大いに啓発され、質疑応答も活発に行われ、アカデミックな時間を過ごせた。若手ショートスピーチとしては東京北医療センター・臨床研修センターの石澤嶺先生（平25）、東京大学乳腺内分泌外科・大学院の小西孝明先生（平25）、国立成育医療センターから厚労省母子保健課に出向の千先園子先生（平21）から勤務先の紹介、現在の仕事の内容、将来の抱負などが述べられた。東京に出てきてからの努力が示され、同窓の諸先輩にとってインパクトある後輩のプレゼンテーションであった。本総会には元ゐのはな同窓会長及び東京支部名誉会長の長澤仁一先生、済陽高穂（わたようたかほ）現ゐのはな同窓会長、栃木の十川康弘支部会長の出席を頂き、さらに研修医、学生さんまでの巾広い世代の出席もあり、懇親会では名刺交換や幅広い情報交換がなされました。閉会の辞が述べられるまで、時間の経つのを忘れる楽しい会となった。

出席者

長澤仁一（昭24）、伊藤達雄（昭42）、河村弘庸（昭44）、橋本英明（昭45）、済陽高穂（昭45）、櫻井幸弘（昭46）、高林克日己（昭50）、稲田晴生（昭52）、吉原俊雄（昭53）、石川てる代（昭53）、栗原正利（昭54）、永瀬裕三（昭54）、石川広己（昭55）、十川康弘（昭55）、角田隆文（昭57）、桑原洋一（昭57）、白澤卓二（昭58）、大野博司（昭58）、島田英昭（昭59）、赤倉早苗（昭59）、窪田徳幸（昭60）、石井康宏（平元）、岡本和久（平２）、黒田徹（平２）、丸山紀史（平２）、小保内俊雄（平３）、三浦文彦（平３）、井上賢治（平５）、菱木知郎（平５）、奈良橋俊子（平９）、木内英（平11）、吉田健一（平11）、大野幸恵（平17）、吉村健佑（平19）、千先園子（平21）、豊田幸子（平23）、小西孝明（平25）、石澤嶺（平25）、橋本尚英（平26）、赤倉奈緒実（平30）、國富美由（医４年）、土橋正弥（医３年）、吉良慎一（医３年）、水谷萌（看３年）

（吉原俊雄）

各地ゐのはな会　開催のお知らせ

埼玉ゐのはな会　令和元年度総会

日時：令和元年10月27日（日）　午後３時より

会場：大宮パレスホテル

特別講演

胃癌治療ガイドライン最新情報

座長：JCHOさいたま北部医療センター外科部長
　　神宮　和彦　先生（山梨医大・昭63）

講師：東邦大学大学院臨床腫瘍学教授
　　東邦大学大森病院がんセンター長
　　島田　英昭　先生（昭59）

HPVの生物学と千葉大学医学部の現況と将来

座長：JCHOさいたま北部医療センター外科部長
　　植松　武史　先生（昭55）

講師：千葉大学大学院医学研究院分子ウイルス学教授
　　白澤　　浩　先生（昭57）

叙勲、褒章その他祝事に関係された方は是非同窓会事務室までご一報ください。編集部でも絶えず注意しておりますが、ニュースに接し得ない事態もあります。お喜びはなるべく早く、同窓の皆様にもお分けしたいと思いますのでよろしくお願い申し上げます。

君津・木更津ゐのはな同窓会

令和元年度君津・木更津ゐのはな同窓会総会は去る6月26日（水）に木更津市の東京ベイプラザホテルで開催されました。君津、木更津、富津、袖ヶ浦市内で開業されている先生方をはじめ、君津中央病院の医師、OB、研修医など計33名が参加されました。まず青柳博会長（昭49）からご挨拶があり、その後事業報告、会員の動向報告（新入会9名、退会2名、令和元年6月現在会員数106名）と役員人事の承認、会計報告等がなされました。昨年は物故会員なく、全員無事元気であったことが報告されました。

今年度は千葉大学整形外科の大鳥精司教授（平6）をお招きし、君津中央病院整形外科部長大塚誠先生の司会のもと、「高齢者腰椎疾患の診断、治療と問題点－特に筋に着目して」と題しご講演戴きました。まず講演のはじめに、千葉大医学部の現況、新しい医学系総合研究棟の建築進捗状況の説明がありました。研究棟と病院がドッキングし、夏暑く冬寒い連絡道路を通ることなく、雨の日も濡れずに研究棟と病院を往復できるようになるとのことです。

講演では千葉大学整形外科教室脊椎グループの紹介、一般的な高齢者腰痛、高齢者腰痛のレッドフラッグ（生命に危険な腰痛）等のお話がありました。聴講していた先生方も高齢者が多く、我が事のように皆さん真剣に聞いておられました。写真撮影の後懇親会場に移り、君津中央病院名誉院長福山悦男先生（昭36）の音頭による乾杯の後、会員の近況報告や昔談義に花を咲かせました（大鳥教授も平成7年初出張病院が君津中央病院で、当時の逸話が披露されました）。懇親会中締め後、会場を市内の花街？に移し2次会となり、大鳥教授にも夜遅くまでお付き合い頂きました。

写真右から

前列：海保隆（昭57）、田中正（昭49）、田中弘一（昭42）、青柳博（昭49）、大鳥精司（平6）、福山悦男（昭36）、片海七郎（東邦大・昭40）、田中寿一（昭43）

二列目：菊池周一（平元）、孫莉玲（平3）、永嶌薫（昭56）、李元浩（昭53）、三枝奈芳紀（信州大・昭57）、畦元亮作（昭58）、布村正夫（昭53）

三列目：鈴木徳孝（金沢大・平30）、加藤大介（昭62）、内田大学（山梨医大・昭62）、鮎澤溶一（北里大・平元）、竹内修（東海大・昭61）、北村伸哉（平元）、渡部良夫（昭63）

四列目：北村充広（高知大・平21）、木内均（山梨医大・平18）、大塚誠（平7）、山田博之（平9）、柳澤真司（昭60）、藤由崇之（島根医大・平12）

最後列：縄田健斗（昭和大・平21）、伊勢昇平（愛媛大・平25）、新行内龍太郎（山口大・平29）、清水弘則（平4）、諏訪部信一（平3）

（海保隆）

ゐのはな一杯会

令和元年6月22日、京成ホテルミラマーレにて、令和元年度ゐのはな一杯会が開催された。会員は、千葉中学校、千葉第一高等学校、千葉高等学校を卒業し、千葉医学専門学校、千葉医科大学、千葉大学医学部及び医学部附属病院に在籍した、あるいは在籍中の医師および学生であり、卒業生22名、在学生13名が参集した。

田邊政裕会長より開会の挨拶があり、その後総会が開催された。今年度は3年生の石毛昭太君が中心となって会の企画・運営を担当し、会計報告や今後の運営など討議された。その後、最年長の市川邦男先生（専25）の乾杯の挨拶があり、懇親会に移った。今年度は在学生が少ないということで恒例のワールド・カフェは企画されなかったが、長嶋晟先生（専25）が初めて参加されるなど、従来あまり参加されていなかった先生方のご参加が多くあり、大変盛況であった。参加者一同集合写真を撮り、その後閉会とした。

写真右から

前列：神崎頼仁（昭46）、中村宏（昭43）、松本生（昭36）、田邊政裕（昭49）、市川邦男（専25）、長嶋晟（専25）、鈴木一郎（昭42）、中野義澄（昭45）、永岡喜久夫（昭45）、杉田克生（昭54）

中列：大川（飯塚）玲子（昭47）、奥田桂子（順天堂大・昭57）、佐藤奈緒（医5）、村松彩水（医1）、外山涼（医1）、中村欽哉（昭46）、広瀬彰（昭48）、古川裕斗（医1）、加藤佳瑞弘（医1）、布施和華子（医3）

後列：加藤一喜（平5）、三橋暁（弘前大・平2）、諏訪園靖（平6）、甲斐心皓（医3）、笹井洸希（医2）、丸山浩（昭58）、水谷正彦（昭52）、今関文夫（昭54）、本吉究（医6）、伊藤彰一（平10）、結城駿（医6）

（田邊政裕）

クラス会

五五会（昭30）有志の会

2015年に卒後60年の記念の会を開催して以後、五五会は有志の会として、毎年定期的に続けてきたが、今年も6月2日（日）お茶の水の「銀座アスター」で行われた。参加者は会員12名、同伴夫人2名の計14名で、会員の顔ぶれは昨年と変わらない。一度欠席になれば、その後に出てくるのは身体的にも更に厳しくなり、益々億劫になるものである。これからも、減っていくことはあっても、増えることはないように思えるのである。

90歳前後ともなれば、年々櫛の歯の欠けるように減っていくのも仕方のないことだが、昨年は貴家昭而、桐原重徳、高橋宣光の3君が鬼籍に入られた。また、3名の夫人方が亡くなられており、皆さんのご冥福を祈って黙祷を捧げた。これで物故会員は65名となり、何とか令和の時代を迎えられたのは37名、相変わらずの消息不明は3名である。

目出度い事としては、国の叙勲の栄に浴した人が3名、日本医師会から米寿の祝いを贈られたのは6名との事である。

近況報告では、この数年で、身体的に大きなダメージを受けたが幸いに回復したという人もいるが、以前からの持病が続いているものの、何とか日常生活は自立しているという人が多いようである。健康、病気が話題の中心である。少しでも診療に従事している人も結構いる。また以前に比べると高齢による難聴の人が増えてきて、会話がだんだん声高になっているように思われた。足腰の衰えにしても、前はこんなではなかったのにと、お年寄りの患者さんからよく聞かされた愚痴が、今は我が身となって思い当たるのである。

会の開催に併せて、五五会会報の発行も続けられていて、誌上の近況報告で、欠席の皆さんの消息を知ることが出来るのも嬉しい事である。介護が必要になったり、更には施設の世話になったりという人もだんだんに増えてきて、家族の方の代筆が結構見られるようになった。一方では、いつもながら返信なしが続いている人も3割ほどみられる。旧友に会うのを楽しみに出席している人、出席したいけれど残念ながら身体の方が思うに任せない人、もともとあまり関心がない人、夫々が同じ位の割合で続いているのだが、それも、我々ぐらいの年配の特徴ではないかと思えるのである。

このところ会の度に、来年はどうするかという話題が出るのだが、出席している皆さんの意見としては、「有志の会」としたのだから、身体が効くうちはもう少し続けたいという意向に落ち着くのである。超高齢者にとって、1年先は結構遠い話なのだが、折角、令和の時代を迎えられたので、この上はもう少し頑張って、東京オリンピック、パラリンピックイヤーをも目指そうと思うのである。

写真右から
前列：中野政雄、浅見敦、高橋康、小泉準三
後列：中野夫人、藤山嘉信、志村昭光、清水良平、伊藤夫人、伊藤敏夫、新井多喜男、村瀬靖、伊谷昭幸、加濃正明

（藤山嘉信）

ゐのはな37クラス会（昭37）

新年号令和を愛でて令和元年6月29日、梅雨寒のなか、恒例の帝国ホテル東京17階プライベートダイニング「アクア」で開催した。時恰も厳戒の大阪G20サミット中であった。

青森から遠来の福士和夫君を含め27名の参加を得た。昨年と同じ人数で嬉しい限りだ。欠席者の返信開示によると殆どはロコモのようだ。シンガポールの町田孝子さんのメールでは「元気に独り暮らしだが息子夫婦が近所にいる。時々友人と会い、ランチや近くの森を散歩、杖を頼り乍ら遠足も楽しんでいる」と。ミニ・クラス会（小岩37会：年4回）の代表世話人勝田貞夫君がロコモで今回は欠席なので、石山淳一君と岩倉弘毅君がお見舞いに行き、状況と元気な写真を提示してくれた。昨年元気に「あと10年はゴルフを愉しむ」と述べていた本多満君から肺がんの闘病中との驚きのはがきを貰い添えて報告した。体調不良という返信の藤森宗徳君へ電話した。声は元気でしたが、やはりロコモ（下肢痛）で遠出は無理と。

昨年の会計報告後、常任幹事岩倉君の司会で進行。昨年のクラス会以降亡くなった故村田三紗子さん、故伊藤文雄君、故黒岩璋光君を含む27名の物故会員へ黙祷を捧げて故人を偲び、ゐのはな同窓会理事宍倉正胤君の発声で再会を歓びシャンパングラスを挙げた。このところ体調不良で欠席続きのへき地医療への貢献で「第48回保健文化賞」を受賞した将基面誠君を心配して、話題提供に岩手県田野畑村『健康まつり』を成功させよう！と昭和62年に37卒同級生が立ち上がり、村民へ専門医による総合健康診査を手弁当で協力実施した当時の資料と新聞記事のコピーを岩倉君が配布した。昭和62年（1987）9月14日付け地方新聞の見出し「同級生っていいものだ」将基面所長談、千葉大出身の専門医13人『友情病院』開き励ます。医療過疎地で2日間村民の1割が受診。9月21日の支局長コラムに『赤ひげと13人の仲間』と題し、石山君の激励の訪村がきっかけで同級生に呼びかけた経緯などが書かれていた。協力した同級生は整形外科の故重広信三郎君、布施吉弘君、眼科の福士君、皮膚科の田島誠君、耳鼻科の森豊君、泌尿器科の瀬川襄君、脳神経科の小野幸雄君、石山君、小児科の矢野靖子さんの13名でした。将基面君は吉村昭が絶賛した感動的な「無医村に花は微笑む」を著し、テレビドラマにもなり、話題になった。是非、回顧録を体調恢復した本人から聞きたい。

恒例の近況報告では、矢野さんはその時の田野畑村とのご縁で今でも当地からオーガニック牛乳を摂っている。福士君は故黒岩君に生前請われていたので弔辞を述べた。安達恵美子さんは意外にも歌舞伎役者の追っ掛けを愉しんでいる。宍倉君は身長が10㎝縮小し、伯野中彦君にオーバードライブされると、主宰するゴルフの『62（無二）の会』での故伊藤文ちゃんとの思い出話。整形外科医山根友二郎君も身長の縮小に愕然としたと。伯野君は開業を続け患者の超高齢化で自己

も『断舎離』開始。井坂誠二君は週1～2回仕事して、贅沢クルーズを楽しんでいる。中村嘉孝君は検診医のみを続けているが自分の健康状態を知りフィードバックして助かった、健康管理の大切さを体験した。大原啓介君は仕事へ出掛ける自動車運転が最近怖くなったと。森君は山岳部OB会で故嶋田晃一郎君の墓参をした。柳沢健一郎君は昨年股関節人工骨置換、心アプレーション治療、ペースメーカー植え込みしたが2年ぶりに杖なしの元気な姿をみせてくれた。山本駿一君は健康そのもので若々しくフルタイマー。高梨健治君は今も老健施設勤務を続け、夫人亡き後のんびり自適生活。石山君は老々介護だが児童相談所の相談医は乞われて抜けられず。瀬川君は心アプレーション治療後、脊椎管狭窄症の神経ブロックを、吉川正宏君は子息へ後継し引退した。孫は東北大学医学部へ、開業は3代安泰。伊東治武君は膵臓がん術後4年半で再発徴候皆無、週2回後継子息の外来診療を手伝っている。小野君は東京月島へ終の棲家を、週1回筑波へ健診事業に、最近運動に目覚めゴルフを愉しんでいる。土井修君は画像診断へのAI導入で20世紀のradiologistは仕事場から退場目前だと。日浦利明君は80歳超えても未だ学究心は抜けなくスキルスの原因論を語る。大野孝則君は現世の動きに追随敵わず読書三昧、やや引きこもり傾向にありと、油井信春君は前立腺肥大、腰痛に悩まされているがクラス会だけは楽しみに出ると、監事として有り難い。油井真知子さん、心境は町田さんと同じだがコーラス演奏会へ執心、「逢えてよかった」を独唱。入枝幸三郎君は無理せず自適に生きていると仙人の境地に近づいている。小林聰介君はお開き寸前に遅参、五輪に向けたバドミントンの会合のためで、女子チームは五輪勝利有望と。岩倉君は「俺もアウス医者だ」と自嘲気味だが、前立腺がん根治術後遺症状を克服し、今なお看護学校の講義も熟しながら、ご子息院長の後ろ盾をちゃんとやっている。常任幹事杉岡昌明（筆者）も週3日後継息子の外来診療の手伝い（キャリーオーバー患者中心に）をしています。総じて会員は一病息災で上手に〝with aging〟しているようだ。全くリタイヤしたものは少数で、大方は勤務態勢に拘らず医療・健康・福祉関係の仕事へ時間を割いている。国立大学で安い授業料、育英奨学金の国税で教育をうけ、医局無給医をバイトで過ごした我々は働ける知力、体力、気力が残っていると自認する限り「働き方改革」無縁の天職で活きてきた自負で社会へ還元し続けましょう（今まで沢山税金は払ってきたが……）。

今年、三大死因として、1位「悪性新生物」、2位「心疾患」に次ぎ、「肺炎」「脳血管疾患」を抜いて、初めて「老衰」が3位になった。死亡診断書の死因病名に「老衰」と記載する医師が増えてきているらしい。少子超高齢多死社会の終末期、延命措置を控える背景に納得。油井（真）さん指揮で「ふるさと」をみんなで合唱し来年の再会を約してお開き。来年の「ゐのはな37クラス会」は令和2年6月27日（土）を予約しました。メモしてください！小林君が遅れたので、2次会をアクアのバーで、小林君を囲み、石山、大野、宍倉、森、岩倉、杉岡で9時前まで歓談した。

写真右から（岩倉君の撮影）
前列：石山淳一、山本駿一、井坂誠二、安達恵美子、油井真知子、土井修、伯野中彦、杉岡昌明
中列：中村嘉孝、森豊、矢野靖子、吉川正宏、宍倉正胤、伊東治武、福士和夫、小野幸雄、瀬川襄、日浦利明、大野孝則
後列：入枝幸三郎、岩倉弘毅、山根友二郎、大原啓介、高梨健治、柳沢健一郎、油井信春
＊小林聰介君は撮影時遅参

（杉岡昌明）

参旧会（昭39）

今年の参旧会（昭39）は東京勢が担当し、改装なった東京ステーションホテルで、令和初として、5月19日に開催しました。出席者数は偶然にも、本会に縁のある39名でした（会員28名、夫人11名）。

実は我々より以前に、さんご会（昭35）が去年と今年、当会場を既に利用しており、委細は「ゐのはな」前号（181号）に載っています。

宴会に先立って写真撮影をしたのですが、つくば市からはるばる介護タクシーで駆け付けてくれた額賀章好夫妻が、首都の交通渋滞に巻き込まれて遅刻しそうになり気を揉みました。

この一年に物故された塚田正男、齋藤裕康、滝沢和彦、三君の冥福を祈って、黙祷を捧げました。

久方振りの出席となった河井克仁幹事の乾杯の音頭で開宴となりました。フレンチのフルコースに舌鼓を打ちながら、恒例の近況報告に入りました。

お互い傘も破れる寿（とし）頃ともなりますと、毀誉褒貶に一喜一憂する必要もなくなり、寄る年波と知力の衰えに対処して、如何に健康寿命を維持するかが話題の中心になりました。

多人数でしたので一人4分間の時間制限を設け、かつ令夫人の発言は特に希望する方のみに限りましたが、それでも全員が話し終わる頃には中締めの時間が迫っていました。

掉尾を飾ってくれたのも河井幹事で、学部時代から撮り貯めた8ミリフィルムをDVD化し、特設スクリーンで上映してくれました。

半世紀余の時を隔てて、学3の『第4回東医体（新潟）』や、学4の『ゐのはな祭』など、懐かしい青春の思い出が眼前に蘇りました。DVDのコピーは同君の好意により出席者全員に配布されましたので、持ち帰って認知症予防のツールとして使えるかもしれません。

もう一人の中村征一郎幹事も、素晴らしい土産を用意してくれました。「千葉今昔」というタイトルの自作の風景写真集で、亥鼻キャンパスの変遷を偲ぶ「よすが」となりました。

最後に、歌人・根岸敬矩君の詠で、本文を閉じさせて貰います。

東京の空の光を取り込みし
アトリウムの間に

学友（とも）らとつどふ
口々に再開約して会ひらき
三々五々と帰途につき退く

写真右から
前列：碓井夫人、角張夫人、角張雄二、万本盛三、高根健、林學、川西恭子、遠藤毅、根岸敬矩、木内政寛、額賀章好

二列目：秋草克彦、碓井貞仁、万本夫人、高根夫人、河野守正、山下武広、清水天、伊藤晴夫、大塚嘉則、上原朗、深尾夫人、秋草夫人、重松夫人、鈴木夫人、額賀夫人

三列目：阿部一憲、鈴木守、鈴村博一、山本弘、今野貞夫、中村征一郎、河井克仁、深尾立、計見一雄、山口正敏、山本夫人、山口夫人、崎山樹

（山本弘）

ちよに会（昭42）

今年の昭和42年卒のクラス会（通称ちよに会）は、平成31年4月21日（日）午後1時から3時迄ホテルグリーンタワー幕張で行われた。

例年は、6月の第1日曜日に開催されることになっていたが、今回は午前中に放射線医学総合研究所（放医研）の、市民一般に向けた所内公開日に合わせて見学が企画された。そのため例年より2か月早く開催された。放医研見学の後、会場には28名（内放医研見学者25名）が参加した。今年は幸い黙祷の対象者はなかった。参加を予定していた大場俊英、高崎健、林益子、藤澤武彦諸先生は当日の仕事などの都合で欠席した。

放医研は、前年（平成30年）国策で旧原研と統合され正式にはQST国立研究開発機構・放射線医学総合研究所と改名されている。見学は、重粒子線がん治療装置（HIMAC）と治療室を中心に行われた。HIMACは、地下60メートルに埋められ普通は見ることはできない。しかし、この日は特別に一般公開がされた日のため、詳細に見学と説明を受けることが出来た。直径36メートルの2重のシンクロトロンからなる装置が、25年間故障もなく稼働し治療を支えている。また治療室は改良され数年前に新たに増築された新治療棟に納められている。300トンもある回転ガントリーが新設され、コンピューター制御の照射台などと共に一連の照射装置に組み込まれ快適な治療を可能にしている。このシステムは、日本の優れた物理工学により医療用に特化して建設された巨大加速器であり一見の価値があると思われる。

午後のクラス会の会場では冒頭に放医研治療課長山本直敬先生のミニレクチュアが行われた。現在、骨軟部腫瘍、小児がん、頭頸部癌、前立腺癌は保険収載され健康保険の対象となっている。肺癌、肝癌、膵臓癌などその他の諸臓器癌はまだ高度先進医療の対象であり314万の治療費がかかるが、近く保険収載になると思われる。私達も、高齢となり手術あるいはそれ以上の治療効果があり、身体に優しいこの治療に関心が高いのか、多くの仲間が見学に訪れた。すでに治療を受けた仲間や希望する仲間もいる。山本先生は、新治療課長に昇進し現場を統括する治療医である。見学したばかりのシステムの解説をし、全治療成績を紹介した後、専門の肺癌治療及び特に早期肺癌の1回照射法の成績を具体的に詳しく紹介した。当治療法は、今回の幹事の宮本忠昭が在職中に開始し、後任の山本先生が引き継いだ。山本先生は信州大学を卒業後千葉大学呼吸器外科に入局し、放医研に派遣された経歴がある。同医局と同医局の教授であった藤澤君から特に全面的協力と支援を得ている。

講演終了後は、代表幹事の守屋秀繁君の挨拶に続いて出席者全員から、それぞれの現況や思いが笑いを誘いつつ和やかに紹介された。特に更科廣實君が、故原征洋君（頭頸部初発の肉腫）と若き日に開聞岳に一緒に登った時のことを思いだし、昨年7月に開聞岳登山に再挑戦したが、炎天下で大変だった。しかし、故原君の声に励まされて登頂に成功できたと、感激の思いを語り出席者皆の共感を得た。また、宮本は故高部吉庸君（ペンネーム、結城五郎、サントリーミステリー賞を受賞した小説家）の膵臓癌の闘病と最後にまつわる話を紹介し、彼が受けた重粒子線治療の結果を現在専門的に解析していると紹介した。既に故人となられた同級生も現在において尚強いきずなで結ばれており、生涯の友人であることを想起する話として共感を呼んだ。

次年度は、中村謙介君、佐野元昭君に幹事を引き受けていただくことになり、東京で開催することが予告されて散会した。

写真右から

前列：服部孝道、大沼直躬、守屋秀繁、谷口克、伊佐治尚文、森田喜崇子、川越和子、関美千代

二列目：龍野勝彦、高橋弘昭、佐野元昭、中村謙介、西牟田敏之、本多陸人、勝俣剛志

三列目：板谷喬起、小林茂雄、森田清、小柳朝明、忍頂寺紀彰、渡辺道典

最後列：河野泉、更科廣實、日笠山一郎、高橋稔、宮本忠昭、片倉透、関隆郎

（高橋稔、宮本忠昭）

研修プログラム

千葉大学医学部附属病院
腎臓内科

千葉大学大学院医学研究院　腎臓内科学
教授　淺沼克彦（順天堂大・平7）

千葉大学腎臓内科は、旧第一内科の5研から始まり、消化器・腎臓内科となったのち、2017年5月に腎臓内科学講座が新設され教授として淺沼克彦が就任しました。

千葉県はその人口に比べ腎臓専門医数が少なく、北海道と同等といわれます。そのため外来には、腎炎・ネフローゼ症候群をはじめ、保存期腎不全や透析を要する末期腎不全症例まで沢山の患者さんが来院されています。複雑な併存症のため他診療科と連携する機会も多く、大学病院の腎臓内科としての意義を日々痛感しております。現在は小さな診療科ですが、医局員全員で千葉大学腎臓内科の歴史を作っていくこと、千葉県の腎臓病患者の最後の砦として腎臓病診療を支えていくことを目指し邁進しております。

当科で最も力を入れていることのひとつに、腎臓専門医・透析専門医の育成があります。内科専門研修プログラムに登録する専攻医だけでなく、すでに内科研修を終えた先生や、新たに腎臓内科を学びたいと考える先生に対しても、専門医取得に向けた研修プログラムを用意しています。より専門分野に特化した研修をご希望の先生に対応できるよう「自由設計プログラム」も用意しています。腎病理、血液浄化、基礎研究など特定の分野に関心の高い先生には、できるだけ希望に沿った研修ができるよう個別に相談に応じています。同様に、様々なライフイベントによって規定通りの研修を行うことが難しい方には、キャリアが中断することのないよう支援していくことを心掛けています。また、大学院へ進学した場合には、基礎研究だけでなく臨床研究での学位取得も指導しております。少人数の医局だからこそ多様なニーズにお応えすることができる点が当科の魅力です。

千葉大学腎臓内科は、出身大学が多様なだけでなく、外科系診療科での診療経験のある医師、県外施設で腎臓研修を行ってきた医師など、その経歴が多様性に富んでいることも特徴です。たとえば、糸球体疾患の病因解明や治療薬の開発を目指す先生、透析用バスキュラーアクセス（内シャントなど）作成などの内科医でありながら手術のスペシャリストを目指す先生、腎生検検体の染色から病理所見に精通することを目指す先生、医学教育に特化した教育担当医師など、これまでの自身の経験や知識を生かして、チームワーク良く日々の業務に取り組んでおります。

これから腎臓内科での研修を考えている先生方にも、自分の長所や特性をみつけて、個々が千葉大学腎臓内科の唯一無二の重要な存在となってくれることを期待しています。

横浜労災病院

名誉院長・千葉大学医学部臨床教授
西川哲男（昭47）

横浜労災病院は1991年に新設された650床の労災病院で、厚生労働省関連施設・独立行政法人組織として運営されている。総医師数265名（正規医師：147名、専修医：65名、後期研修医：9名、専門医制度専攻医：9名、初期研修医：35名、うち東京大学たすきがけ3名、横浜市立大学たすきがけ2名、千葉大学たすきがけ1名、歯科研修医1名）の構成をもち、横浜市北東部中核施設として横浜市の北部医療圏の中心となる高度医療センターである。すなわち、横浜市港北区・神奈川区・都筑区・緑区などの区民を守る急性期医療を展開している病院である。地域医療支援病院であり、地域がん診療連携拠点病院でもあり、スーパーICUを持つ救命救急センターを併設している。その結果、多くの医学生が見学に来院し優秀な人材がマッチングに参加する医療施設となっており、同時に、薬学部学生など医師以外の職種の研修指定病院ともなっている。

当院のモットーを示す。

1 勤労者医療の展開
2 高度医療の実践
3 救急医療の充実
4 地域医療の支援
5 安全な医療の定着
6 優れた医療者の育成、となり、特に教育体制に力を入れている。その基本方針は、医師としての研修は、生涯継続する点を強調しており、傍観者的研修は不要で、研修の場は独立心と責任感を植え付ける厳しさが必要であると考える。また自分だけではなく周囲への影響も大きい為、Group dynamicsが組織活性化の方向に動いていくよう病院全体で考える必要がある。

研修医としては、診療能力を高める努力を2年間続けることができ、かつ、協調性を大切にしつつ、互いに切磋琢磨する関係を築くことができる人を望んでいる。そして、可能な限り秀でた人材として、将来日本の医療の中心を担う大望を胸に秘めた個性あるユニークかつ荒削りな人物を求めたい。

一方、研修希望者が考える良き研修とは何であろうか。学生たちは異口同音に、周りに良い仲間がいる、様々な症例を経験できる、自分で考える時間を持てる、やりたいと思ったことを経験できる、良い指導医が多くいる、などの条件を挙げる。そして住環境を含め過不足ない給与を望んでいる。当院はそれらを十分に満たす都会型有機的診療体制を持つ研修病院として、人気が高い施設である。

専門科の特徴の一部を紹介する。

内分泌糖尿病内科：糖尿病に加え日本の代表的な内分泌疾患センター（アルドステロン症等）として機能。

腫瘍内科：本邦でも数少ない専門家の診療が可能で緩和医療にも精通。

神経内科：脳神経外科とともに脳血管内治療や、筋疾患から難病まで扱う。

循環器内科：救急に対応し、心カテ数が多く、不整脈治療を行う。
整形外科：外傷治療が多い。脊椎外科も多数。
脳神経外科：脳腫瘍を扱いガンマナイフ治療を行う。
泌尿器科：前立腺がん等手術例数が多く、いち早くダヴィンチ手術を開始。
集中治療科：高度ＩＣＵを備えている。
心療内科：食思不振症を含めメンタルヘルスセンターを併設している。

当院の研修プログラムを示す。必修科目は、①内科6ヶ月（24週間以上）：呼吸器内科、神経内科、循環器内科、消化器内科、内分泌・代謝内科／リウマチ・膠原病内科、腎臓内科、血液内科／腫瘍内科の7分野から3分野以上を研修。②救急3ヶ月（12週間以上）：救命救急センターでの2ヶ月＋1年次6月以降の夜間休日当直で1ヶ月分。③地域医療1ヶ月（4週間以上、2年次）。平戸市民病院、平戸市立生月病院、青洲会病院（平戸市内）、横浜市総合保健医療センターと福村内科、横浜市総合保健医療センターと福澤クリニック、から1つを選択して研修する。④外科、小児科、産婦人科、精神科（精神科研修は他院で研修）、各1ヶ月（4週間以上）。外科は、外科、心臓血管外科、呼吸器外科、整形外科、脳神経外科、泌尿器科の6分野から1分野を選ぶ。

このように多彩な選択性（約1年間自由に選択可能）とフレキシブルに変更可能なローテートスケジュールが本プログラムの特徴である。さらに、積極的に学術活動に参加して知識の向上や発表の技術を習得してもらい、その際の参加費や旅費の補助も行っている。過去12年間の研修医の出身大学は、横浜市立大学33名、慶応義塾大学30名、千葉大学25名、日本医科大学8名、福島県立医科大学7名、北海道大学、東京大学、東京慈恵会医科大学各6名、山梨大学5名、東北大学、群馬大学各4名、筑波大学、順天堂大学、札幌医科大学、東京女子医科大学各3名、旭川医科大学、弘前大学、新潟大学、大阪大学、香川大学、熊本大学、鹿児島大学、産業医科大学、琉球大学、東海大学各2名、秋田大学、金沢大学、滋賀医科大学、信州大学、浜松医科大学、岐阜大学、岡山大学、島根大学、宮崎大学、奈良県立医科大学、大阪市立大学、昭和大学、北里大学各1名。

平成31年度では、慶応義塾大学5名、横浜市立大学3名、札幌医科大学、群馬大学、千葉大学、北里大学、東海大学、岡山大学、宮崎大学各1名（男性10名、女性5名）である。後期研修制度、すなわちいわゆる新専門医制度では、専門医機構の指針に従って内科、小児科、救急で基幹病院として独自のプログラムで研修を実施、そのほかの診療科は各大学の関連施設となっている。内科は、初年度7名、本年度は8名が内科専門医研修に入っている。

以上、当院の研修制度は極めて多彩かつ効率的な卒後研修を施行し、その後大学や専門施設でのさらなる研鑽を行っている。日本のメイヨークリニックを目指すと職員を鼓舞してきた結果、各診療科を含め医療職の皆さんも率先して若い医師の教育に携わってもらい、当院での研修で社会性と人間性を高めてもらっている。

当院在籍のゐのはな同窓会員を紹介します。

名誉院長：西川哲男（昭47）、**元副院長（外科）**：尾崎正彦（昭52）、**元副院長、前鹿島労災病院長（泌尿器科）**：山口邦雄（昭53）、**副院長、内科部長**：平澤晃（昭60）、**内分泌・糖尿病センター長**：斎藤淳（愛媛大・昭62）、**リウマチ・膠原病センター長**：北靖彦（昭62）、**糖尿病内科部長**：鶴谷悠也（平15）、**内分泌・代謝内科**：滝口朋子（島根大・平20）、**膠原病内科部長**：藤原道雄（宮崎医大・平10）、阿部和也（平28）、**血液内科部長**：阿部大二郎（山口大・平11）、**消化器内科**：芹澤奏（平28）、遠山翔大（平29）、**外科部長**：篠藤浩一（平4）、**消化器外科部長**：岡崎靖史（弘前大・平5）、**外科**：大塚亮太（新潟大・平22）、玉地智英（島根大・平22）、高橋有未子（琉球大・平22）、佐々木匡啓（獨協医大・平27）、**小児外科**：大野幸恵（平17）、**泌尿器科部長**：永田眞樹（平3）、**泌尿器科**：井上淳（平10）、宮崎兼孝（平14）、千葉量人（平14）、佐藤航大（平26）、田村貴明（平26）、**臨床研修医**：城野誉士（平30）、妹尾杏奈（平30）、竹内幹人（平30）、新井友理（平31）

研修医だより

千葉大学病院での後期研修に臨んで

千葉大学医学部附属病院　消化器内科
堀尾亮輔（平28）

私は2016年に千葉大学を卒業し、千葉市立青葉病院で2年間の初期研修を終えたのちに、千葉大学医学部附属病院内科専門研修プログラムに入り同病院の消化器内科に入局しました。その後、初期研修を行った青葉病院で後期研修医として1年間勉強させていただき、現在は千葉大学医学部附属病院で研修を行っております。

学生の頃から、消化管・肝胆膵と幅広く臓器を見る中で、胃癌・肝癌などの悪性腫瘍や慢性肝炎・炎症性腸疾患などの炎症性疾患といったように様々な病態を対象とし、手技も多く診断から治療までを行える消化器内科に興味がありました。初期研修において指導医の先生方の熱心なご指導の下、様々な症例を経験させていただき、消化器内科への興味がさらに強くなり入局を決意しました。

青葉病院の後期研修では、数多くの消化器疾患症例を担当し、内視鏡検査・治療および病棟・救急外来診療などの業務に携わることができました。上下消化管内視鏡検査のみならずERCP（endoscopic retrograde cholangiopancreatography）、PTGBA（percutaneous transhepatic gallbladder aspiration）、EMR（endoscopic mucosal resection）、EVL（endoscopic variceal ligation）、TACE（transcatheter arterial chemoembolization）といった治療も術者として数多く経験させていただきました。また、社会的な問題をかかえる患者も多く、診療を行う中で社会的解決能力も向上しました。

現在は千葉大学病院で病棟業務に従事しております。当科は現在、肝臓・消化管・胆膵グループに分かれており、私は現在肝臓グループにて大学病院ならではの最先端の治療に携わっています。難しい症例も多いですが、どの先生も気さくかつ丁寧にご教授下さるため、安心して診療に当たることができています。

私たちの代から内科専門医制度が変更となり後期研修3年間の中で多くの症例の経験が必要となりましたが、当院の内科専門研修プログラムでは関連病院においても大学病院においても消化器のみならず内科全般の研修を行うことが可能となっており、内科医を目指す後期研修医にとって充実した研修が送れることと思います。その中で消化器内科に少しでも興味のある方は、千葉大学消化器内科にて共に働けることを楽しみにしております。

ご住所・ご勤務先等に変更がございましたら当会にもご一報ください。
電話　（043）202－3750
FAX　（043）202－3753
e-mail：info@inohana.jp

追悼

関谷宗英先生を偲んで

生水　真紀夫（金沢大・昭56）

平成31年1月4日に千葉大学名誉教授、産婦人科学教室八代目教授であった関谷宗英先生がご逝去されました。謹んで哀悼の意を捧げます。

関谷宗英名誉教授は、昭和40年に千葉大学医学部を卒業され、附属病院でインターンの後直ちに千葉大学医学部産科婦人科学教室に入局されました。大学院医学研究科を昭和45年に終え医学博士を取得されました。その後、フランス国立保健医学研究所（パリ）にご留学の後、本学の講師（昭和53～62年、8年10カ月）、助教授（昭和62年～平成5年、6年6カ月）を経て、平成5年に教授に就任されました。平成17年3月に退官されるまで、11年に渡って教授として千葉大学産婦人科を牽引されました。医員としてのスタートから数えると33年間という長さです。

関谷先生のご専門は、婦人科腫瘍学でした。ベッドサイドで治療の難しい癌患者さんを担当され、治してあげたいという強い思いから、がんをテーマに選ばれたとお聞きしています。その後、一貫して癌の研究と治療に邁進され、数多くの成果を挙げられました。

関谷先生のご業績の一つは、抗がん剤の多剤併用療法です。多剤併用療法は現在では癌治療の常識となっていますが、関谷先生はわが国の婦人科診療で最初に多剤併用療法を導入し、婦人科癌治療成績の向上に大きな足跡を残されることになりました。

関谷先生の著明なご業績の二つ目は、HMやIMaなどのがん細胞株の樹立です。先生は細胞培養がお上手で、絨毛癌や卵巣癌などの腫瘍組織から、数多くの細胞株を樹立されました。高機能のインキュベーターや特殊培地、管理された血清が容易に使用できるようになった現代においても、遺伝子操作を加えずに初代培養から細胞株を樹立することは容易ではありません。たぐい稀なスキルと忍耐、そして運を持ち合わせておられたのだと思います。先生が樹立された細胞株は現在教室内でも保存しており、必要に応じて教室員も研究に使わせていただいております。

関谷名誉教授が教室を主催された11年間に多くの産婦人科医が育ちました。この関谷教室の卒業生たちが、現在の産婦人科医局を支えてくれています。先生の教育方針は、一言で表現すると自主自立であったのではないかと思います。教室員ひとりひとりの意思を尊重し、それぞれの道に進むことを見守る、そのようなスタンスであったと推察しています。

先生が退任された平成17年の少し前から、全国で医療過誤や医療訴訟などの問題が相次ぎ、国立大学が大学法人へと変わるなど社会情勢の大きな変革が始りました。千葉大でも助産婦学校が閉鎖され、産婦人科医不足が表面化して関連病院の集約化を図るなどの対応が必要となっていました。このような激動のなかでご退任されるにあたり、さまざまな思いがあったことを後に関谷先生御自身からうかがいました。医療資源の集約化は、その後の産婦人科医療のキーワードの一つとなりました。医療資源の集約化はとても難しい作業であり、関谷教授のご苦労がいかほどであったか想像に難くありません。

もう一つ、関谷先生の思い出を語るにあたって忘れることができないことがあります。先生は、この5年あまりに渡って闘病生活を続けてこられました。入院と手術を繰り返されましたが、退院後はできる限り速やかに診療に戻られるのが常でした。一通りの手術治療を終えられるとできるだけ早く退院され、診療業務を再開されました。入院中に教室員が先生の代診を勤めておりましたので、教室員の負担を減らすべくできる限り早く診療に戻られるようにされていたのだと思います。退院時にはいつも感謝の言葉をいただきました。闘病生活に一言の愚痴をこぼされることがなかったことも、関谷先生のお人柄を現しています。

長年にわたり多くの業績を残された先生でしたが、ご自身の成果を示すことには控えめで謙虚な姿勢を貫かれました。物腰も穏やかで、同門会の席でも医局員に丁重に話をされる姿が印象的でした。

関谷先生、長らくお疲れ様でした。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

雑文雑談

匝瑳卿輔

石出　猛史（昭52）

「そうさ　きょうすけ」と読むのだろう。江戸幕府の起立以来小伝馬町牢屋敷の牢屋奉行を勤めてきた石出帯刀が明治政府によって解職された後、牢屋敷の取締を勤めた人物である。以前『房総の郷土史』（第36号2008年）に書いたことがあるのだが加筆して紹介する。卿輔は明治維新当時五千石の旗本大久保與七郎家の家老を勤めていた。與七郎は文久2年（1862）実兄で当主であった彦兵衛の死に伴って家督を相続。官職名は伊賀守・備後守である。中奥小性・火消役を勤め邸地は外桜田にあり2116坪余であった。知行所は武蔵・上総・下総に分散していた。

兄の彦兵衛は13代将軍家定の小性、14代将軍家茂の小性頭取を勤め、死亡時は西丸留守居であった。二人の父久五郎（駿河守）は持弓頭・小性組番頭（小性組は警備隊で小性とは異なる）・将軍家定の御側（秘書役）を勤めた。これらの役職のうち五千石高の役職は将軍付御側と西丸留守居で、それ以外の役職は五千石以下の家禄でも就ける役である。與七郎が就いた中奥小性は千石高の役職である。この役に八百石の旗本が就く場合には、その差の二百石が臨時に加増される。五千石以上の禄高に相当する役職があまりないので、下げ職（格下の役職に就く）というよりは、千石以上の家禄があれば就ける役と解釈することもできる。

匝瑳卿輔は下総国匝瑳郡南條村柴崎（現匝瑳郡横芝光町）の出身で字を胤常と称した。父は匝瑳卿輔胤礼、祖父は兵衛胤喜といい、曽祖父は関大和守胤直と称して老尾神社の神官匝瑳重波に国学を学び香取・海上・匝瑳に多数の門下生をもったとある。卿輔の旧姓は関で父の名を世襲したのであろう。卿輔が大久保家に士官した時期は不明である。大久保家は南條村柴崎に知行所を持っていた。そこの優秀な農民であった卿輔を取り立てたのであろう。

高禄の旗本は算術の勉強などしない。算盤勘定は商人がやることである。しかし高禄の旗本といえども知行所からの年貢米の取り立て、家計の運営などに読み書算盤の知識は必要である。知行所にこのような人材を求めることは珍しくなかった。当時庶民の読み書きは平仮名を用いた。一方武家は漢文調の漢字文を用いた。従って農民が中間や下男としてではなく、士分として旗本に仕えるためには当然漢字文に堪能でなくてはならなかった。

幕末から明治にかけての侠客の親分清水の次郎長の直筆の手紙が残されているが、すべて平仮名で書かれている。もっとも当時の博徒が読み書きができたということ自体が稀有であったであろう。

『江戸幕府役職集成』（笹間良彦著、雄山閣）によると「軍役規定」では五千石の旗本の家臣の軍事編成は、騎馬侍5人、数弓3人・鉄砲5人・槍持10人、侍9人・足軽4人等の戦闘員の他馬の口取・弁当持・馬印・草履取・具足持など計103人となっている。幕末の幕府の歩兵隊の編成では一個小隊が40名であるから、2個小隊半位の家臣を抱えている必要があるが、経済的負担も大きいことから平時はこれよりも少かったとある。屋敷内は表と奥が厳重に分けられ、奥は老女格の女中が取りしきった。殿様は駕籠かき4人に担れた駕籠に乗って登城する。この時の供揃えは30人位である。

大久保家は上屋敷の他に下屋敷も拝領していた。五千石の旗本の家老の俸給は二百俵もらえれば良いほうとあるが、知行高に換算すると二百石である。これは幕府の代官や町奉行所の与力と同等であるから、陪臣としてはそう悪くない待遇であっただろう。時期は不明であるが卿輔は大久保家の家老のまま幕府の正規軍である新撰歩兵隊長に任ぜられ、大坂城勤番を勤めた。幕府の歩兵隊は文久2年（1862）西洋式軍隊の創設に伴って設けられた兵科の一つで、当初高禄の旗本は禄高に応じた人数の兵員を提供し、また小普請組（無役の直参）などから徴集された。幕府の軍制改革は慶応2年（1866）以降も行われ、幕府講武所・八王子千人同心なども幕府の陸軍に編入された。

（続く）

同窓会員著書の紹介

『予防接種リスク教育ガイドブック』

石和田稔彦（平2）、杉田克生（昭54）編集
千葉大学真菌医学研究センター感染症制御分野出版
（doi:10.20776/105880）
「千葉大学学術成果リポジトリCURATOR」公開
（https://opac.LL.chiba-u.jp/da/curator/）

杉田　克生（昭54）

予防接種においては、従来不幸な薬害事件の歴史から国民の根底に不信感が存在する。有害事象とは本来因果関係は問わず結果的に生体に好ましくないできごとの総称であるが、医療事故すべてが因果を有する副作用あるいは医療過誤と認識されてしまう。リスクとは「被害がどのくらい重大であるかということと、どの程度の確率で起こるか、という2つの要素の積で表わされるもの」と定義されている。そのリスクに対して、許容できるレベルはどれくらいかを線引きするリスク評価のためにregulatory science（規制科学）がある。日本ではこの観点での科学リスク教育が十分されていないのが現状である。そこで規制科学的観点を導入し、予防接種のリスクを正しく理解するためのガイドブックとして本書を作成した。

本書は、「日本の予防接種の概要」、「高校生に対する予防接種リスクベネフィット教育の目的と実践」、「大学生における予防接種に対するリスク認識の現状」、「予防接種に対するリスク認識の現状」、「ワクチンのリスクを評価するための生物統計」などをわかりやすく解説した。また広く国民に読まれるために、「千葉大学学術成果リポジトリCURATOR」（https://opac.LL.chiba-u.jp/da/curator/）から公開した。リポジトリは、学術論文や研究データ等の学術成果を蓄積、保存し、インターネットで公開するウェブプラットフォームである。DOI（デジタルオブジェクト識別子）が付与され、永続的なアクセスが保たれる。今後ゐのはな同窓会の先生方がこのリポジトリに新たな知見を国内外に数多く発信されることをお勧めする。

予防医学の未来 Sustainable Developmentを目指して

森　千里（旭川医大・昭59）編集
別冊医学の歩み
医歯薬出版（株）　定価4400円（税別）

今回、メインテーマを「予防医学の未来―Sustainable Developmentを目指して」とさせていただいた。Sustainable Developmentとは「持続可能な開発」と訳される。将来世代の欲求を犠牲にすることなく現世代の欲求を満たす開発のことであり、国連は17の目標からなる「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals: SDG）」を2016～2030年までの15年間の活動目標として掲げている。

このSDGの第3番目に「すべての人に健康と福祉を：あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する」がある。

WHOによれば、2012年の非感染症による死者は全世界で3800万人と推定されているが、これが2030年までに5200万人に増えると予想されているという。この背後には、死に至らないまでも生活の質を著しく悪化させた何倍もの数の患者とその家族が苦しんでいるのである。心疾患、癌、慢性呼吸器疾患、糖尿病の四大非感染症は、経済的に豊かか貧困かを問わず世界的に急増しており、この様な健康状態の悪化はSDGの達成を阻む大きな要因のひとつである。

一方、医学の分野では21世紀の医療は「予防医学の時代」といわれる。教育と告知活動、そして適切な介入などの予防対策に注力することを各国が真剣に取り組まなければ、この数を減らすことはできない。国連組織のなかで教育を担当するUNESCOは、Sustainable Developmentを進めるための人材を育てること、すなわち、Education for Sustainable Developmentが重要である、と提唱している。よいスローガンができれば、それを現実のものにするのは人である。SDGについて深く理解し社会のなかで実現化できる人材育成が急務である。

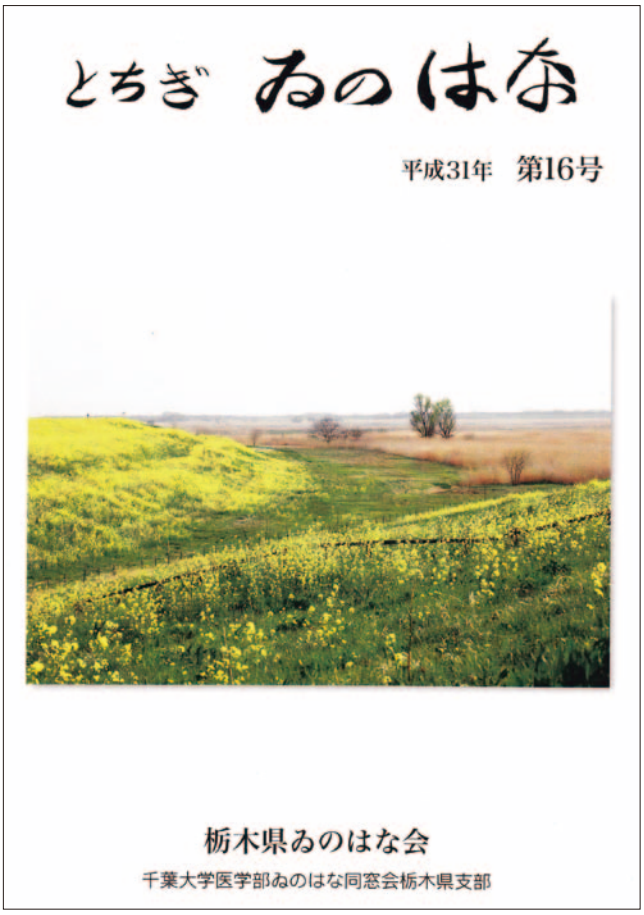
すなわち、21世紀の予防医学を考えるうえで、「Sustainable Developmentを目指した予防医学」の概念の確立と告知活動および教育を含めた普及対策が早急に必要であると著者は考える。

医学の基本は病気の原因を見出し、治療法を開発し、そして予防法を確立し普及させることである。時代の流れとともに多くの医療機器や技術の革新が進み、医学・医療の分野の進歩も目をみはる勢いで進んでいる。

そのため、本書では「予防医学の未来―Sustainable Developmentを目指して」と題し、予防医学のさらなる発展のためご活躍されている先生方に、最近の知見から将来の方向性に関してご紹介いただく。21世紀の新しい医療・予防医学を考えるうえで、本書が読者の皆さまにとって参考になれば、企画者として望外の喜びである。（はじめにより）

栃木県ゐのはな会

平成31年　第16号



とちぎ ゐのはな　第16号

目　次

巻頭言
巻頭言……十川　康弘（昭55）……1

総　会
平成30年度　栃木県ゐのはな会 総会プログラム……3
平成30年 会計報告……小池　正造（昭53）……4
監査報告……齋藤　弘司（昭43）……4
総会写真……5

講演会
脳情報の利用に向けて……神作　憲司（平7）……10
外科医のアイデアから生まれる医療機器開発……川平　洋（平4）……10

特別講演
前立腺癌の話題……市川　智彦（昭59）……12

勲章報告
瑞宝双光章 叙勲報告……布川　武男（昭32）……13

関連病院だより
栃木県立がんセンター……行澤　斉悟（平9）……14
とちぎメディカルセンターとちのき……木内　信二（昭48）……15
済生会宇都宮病院……戸邉　豊総（平1）……16
上都賀総合病院の近況……十川　康弘（昭55）……17
とちぎメディカルセンター……福田　健（昭48）……18
獨協医科大学病院の近況……布施　美樹（平16）……21
国際医療福祉大学……田中　宏一（平1）……22

追悼記
水沼三郎先生を偲ぶ……坂田　早苗（昭34）……25

エッセイ
平成29年ある日の旅日記……門馬　公経（昭42）……26
胸腺腫と抗がん剤……崎尾　秀彰（昭44）……28
栃木県で開業医になって……本多　睦人（昭42）……30

表紙写真・編集後記……35
会員名簿……36
栃木県ゐのはな会 会則……39

千葉県ゐのはな会

平成31年２月　第19号

目次　　表紙題字：井出源四郎氏

巻頭言……秋葉　哲生（S50）　1
追悼　大濱博利先生
大濱先生の愛情いっぱい人生……斉藤　威　2
二代会長　大濱博利先生を偲ぶ……三枝　一雄（S32）　5
大濱博利先生をしのんで……入枝幸三郎（S37）　6
大濱博利先生を追慕して……秋葉　哲生（S50）　7
大濱先生を偲んで……大山　欣昭（S51）　8
大濱博利先生を偲ぶ……中村　眞人（S54）　9
Essay
『基礎医学の半世紀』……奥村　康（S44）　10
臨床と基礎と医薬品開発……野畑二次郎（H17）　11
特集「スポーツと医学」
弓道の世界……藤塚　光慶（S43）　15
スポーツ医学における成功……土肥美智子（H３）　18
スポーツメディクスセンター
～スポーツに関わる全ての人の安全、安心のために～
……山口　智志（H11）　20
自己紹介
自己紹介……岡本　和久（H２）　22
俳句
草の秋……三枝かずを（S32）　23
秋から冬へ……神田たかし（S35）　23
報告
医療を通じて千葉を盛り上げる！新撰医チバのご紹介
……三田　恭義（H23）　24
「次世代リーダー育成海外留学奨学生」
制度立ち上げと第３期奨学生の活動報告
……秋葉　哲生（S50）・吉村　健佑（H19）・千葉県ゐのはな会理事　26
報告１　ボストンから世界を変える……CHEN XINGJIA（医学部４年）　27
報告２　ハーバード公衆衛生大学院 留学報告
……伊藤　志帆（医学部４年）　28
報告３　ハーバード大学公衆衛生大学院短期留学報告書
……岩田　秀平（H30）　30
報告４　打ち砕かれた「ハーバード」への偏見
……飯村　太朗（医学部４年）　31
第16回亥鼻祭を終えて
……國富　美由（医学部３年）・福島　剛（医学部３年）　33
千葉県ゐのはな会支援
「ホームカミング・パーティ 2018.」が開催されました
……吉村　健佑（H19）・三澤　園子（H11）・有賀　翔太（医学部６年）　35
平成30年度総会のご報告……高橋　宏和（H11）　36
2019年度総会案内……39
平成29年度千葉県ゐのはな会会計報告……40
平成30年度千葉県ゐのはな会年会費納入者名簿……42
千葉県ゐのはな会会則……46
編集後記・投稿規定……47

表紙「オンフルール 仏北西部」山口　宗彦（S38）

会員から

古希を迎えた リハビリテーション医からの近況報告

鴨下　博（昭50）

古希を迎えて医療現場に復帰した近況を高齢社会の一つの生き様として報告します。1975年3月本学卒業時にリハビリテーション医の道を歩み始めた私は、2014年3月に多摩北部医療センターリハビリテーション科で定年を迎えました。第二の人生として、創立3年目を迎えた東京医療学院大学の教員を選択しました。

理学療法士、作業療法士を目指す学生にリハビリテーション概論、リハビリテーション医学、神経内科学の講義をしていましたが、就任3年目の春、妻は原田病を発症しました。治療が功を奏しぶどう膜炎は寛解しましたが、再発予防のためステロイド剤、免疫抑制剤の内服が続けられました。妻はその年の秋頃から難聴を訴え、15年前小脳橋角腫瘍（髄膜腫）の手術を受けていましたので脳外科、耳鼻科を受診、翌年に髄膜腫の再発と診断されました。私は翌年の3月に大学を退職し、8月にサイバーナイフ治療を受けることになった妻の介護とリハビリテーションに努めることにしました。

再生医療など最先端医療研究の一翼を担っているリハビリテーション医学は、疾病の治癒、あるいは外傷の救命で治療を終えることなく、後遺症にたいし社会復帰するまでリハビリテーションを行います。しかし、医師を含め多くの人は、リハビリテーションを機能回復訓練と考えているのではないでしょうか。機能回復訓練は社会復帰への第一歩ですが、リハスタッフ、患者とその家族、友人を含む地域社会の連携を基礎とした包括的リハビリテーションが社会復帰に大きな役割を果たしています。社会復帰の成否は、患者自身が人生の変革を成すか否かにかかっており、リハビリテーション医は機能回復訓練にとどまらず福祉行政、地域社会と連携し、患者が障害を受け入れ社会復帰する人生の変革を手助けします。リハビリテーションは、患者が人生を変革するプロセスなのです（1982年国際障害者世界行動計画の定義から抜粋）。私は、包括的リハビリテーションを地域のリハビリテーション活動と理解しています（「リハビリテーション白書」地域のリハビリテーション活動　日本リハビリテーション医学会編集　第1版、第2版）。

サイバーナイフ治療後も不調を訴え受診する度に発作性心房細動、過敏性腸症候群と診断された妻は、2年ほど引きこもりの状態でした。子の助けは無論のこと妻の友人など多くの方々の支援があり妻は徐々に回復していましたが、劇的な変化は息子の結婚でした。昨年9月からは日々食欲が回復し、10月の結婚式後は以前の生活を取り戻しました。地域社会の支援を受けて人生の変革を成しえた、リハビリテーションの成果でした。「唄を忘れた　金糸雀は　後ろの山に　捨てましょか　いえ　いえ　それはなりませぬ　二番、三番略　唄を忘れた　金糸雀は　象牙の船に　銀の櫂　浮き世の海に　浮かべれば　忘れた唄を　思い出す」元の歌詞は浮き世ではなく月夜ですが、この「かなりや」の歌はリハビリテーションの応援歌です。

妻は周囲の人々が驚くほどの回復をしましたので、私も今年の2月に古希を迎えるのにあたり、1月にリハビリテーション医として医療現場に復帰しました。諸先輩からは70、80は洟垂れ小僧と嗤われる覚悟ですが、週4日と半日の常勤勤務となり回復期病棟とリハビリテーション科外来診療を担当しています。私は多くの大学、病院の先輩からリハビリテーションの指導を、そして何よりもリハビリテーションを愛する多くの方々から支援を受けてきました。古希を迎え卒業時の初心にたち返りリハビリテーションに携わる方々と連帯してリハビリテーションに励みます。

学生時代は勉学よりも社会医学研究会の部活動に多くの時を過ごしてきた私は、地域のリハビリテーション活動を実践していく覚悟です。

2019年 第44回
ゐのはな美術展
―千葉大学医学部OBによる美術展―
9月23日(月・祝)～9月29日(日)
AM11:00～PM6:00　最終日4時

初秋の候、益々御清栄のこととお慶び申し上げます。
例年通り下記の会場で、第44回展を開催いたします。
ご多用中恐縮ながら何卒ご高覧賜りたくご案内申し上げます。

銀座
ギャラリー向日葵（ひまわり）
〒104-0061
東京都中央区銀座5-9-13
銀座菊正ビル2F
TEL. 03-3573-1680

第16回 日本周産期メンタルヘルス学会
Japanese Society of Perinatal Mental Health
学術集会

会期　2019年 10月26日(土)・27日(日)
会場　千葉大学亥鼻キャンパス
医学部記念講堂・ゐのはな同窓会館
大会長　渡邉　博幸
千葉大学社会精神保健教育研究センター特任教授
特定医療法人学而会木村病院院長

日本周産期メンタルヘル学会事務局
〒514-8507 三重県津市栗真町屋町1577　三重大学保健管理センター内
TEL 080-3622-8911　E-mail mental-1@pmh.sakura.ne.jp
HP http://pmh.jp/index.html

学内情報

第17回 亥鼻祭開催のお知らせ

亥鼻祭実行委員サークル実行委員長
医学部3年　土橋正弥

本年度の亥鼻祭は11月3日（日）に開催される運びとなりました。今年度はサークルが新体制になって三年目ということもあり、新しいことにも挑戦しつつ、過去に存続の危機にまで追い込まれた亥鼻祭が二度となくならないよう、サークル内の体制をさらに強固なものにしていこうと考えております。

私たち亥鼻祭実行委員サークルは今年度の亥鼻祭に「心時代」というテーマを設けました。亥鼻祭は亥鼻キャンパスに通うすべての学生と普段キャンパスに入ることのない人たちが交流できる場です。後援会の皆様やOB・OGの皆様、亥鼻周辺の地域の皆様、キャンパスに興味を持つ高校生をはじめとした生徒など多くの人がご来場されます。その場にいるすべての人たちの心と心を亥鼻祭が繋いでいく。そんな亥鼻祭を作り上げていけるよう、亥鼻祭実行委員サークルメンバー一同、精一杯活動していきたいと考えております。亥鼻キャンパスの医学部、薬学部、看護学部の学生だからこそできる文化祭を作り上げたいと奮闘する実行委員の熱い思いを、ぜひ会場で感じていただければと思います。

また、当日はゐのはな同窓会館にて「ホームカミングデー」も開催されると伺っております。ぜひ母校を訪れ、亥鼻祭の企画にも足をお運びいただけましたら幸いです。

例年亥鼻祭はゐのはな同窓会やOB・OGの先生方をはじめとする、多くの皆様からのご寄付によって運営されております。本年度も大変恐縮ではございますが、亥鼻祭開催にあたりまして皆様のお力をお貸しいただければと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

最後になりますが、皆様の温かいご支援により私たち学生は今まで亥鼻祭を続けてくることができました。本当にありがとうございます。11月3日の亥鼻祭当日は素晴らしい亥鼻祭をお見せすることをお約束いたします。実行委員サークルの学生一同、皆様のご来場を心よりお待ち申し上げます。

校友会総会

日　時：令和元年11月2日（土）
11時30分～12時00分

場　所：千葉大学
西千葉キャンパス　けやき会館
3階レセプションホール

＊「千葉大学創立70周年記念シンポジウム」を13時30分から開催予定です。

＊総会終了後に、軽食をご用意いたします。

＊大学祭期間中のため、お車でのご来場はお控え下さい。

皆様のご参加お待ちしております。

校友会事務連絡先　043－290－2014

主催：千葉大学ゐのはな同窓会　後援：千葉県ゐのはな会・東京ゐのはな会

第4回 Home coming party 2019.

千葉大学亥鼻祭　同時開催企画

担当：吉村健佑（H19卒）、三澤園子（H11卒）、有川俊輔（H16卒）、鋪野紀好（H20卒）

毎年恒例になりました「ホームカミングパーティ」を今年も開催します！
同日開催の亥鼻祭を楽しみつつ、ゐのはな同窓会館に気楽にお立ち寄りください。
当日は若手・中堅医師の活動をお知らせするプレゼンテーションも企画しています。

ゐのはな同窓会にゆかりのある方はどなたでもご参加頂けます。
なつかしい友人・先輩・後輩に逢えるかも…、お誘い合わせの上ぜひともお越しください。
ご家族連れでも安心してお楽しみいただけます！同窓会ってやっぱり面白い！ですよ。

ドリンク・軽食のご用意があります

2018年に開催された第3回　Home coming party.の様子

日時：2019年11月3日（日）15時～

場所：ゐのはな同窓会館（千葉大学亥鼻キャンパス内）

参加費：無料（ドリンク・軽食などの持ち寄りは大歓迎です！）

※参加登録は不要です

連絡先：Home coming party 事務局（chiba.inohana@gmail.com）

Eisai

疲れた時と肌あれに
チョコラBBプラス
効能・効果：肌あれ、口内炎の緩和　第3類医薬品
「使用上の注意」をよく読んで正しくお使いください。
エーザイ株式会社

医学系総合研究棟（2021年１月竣工予定）

中央診療棟　　外来診療棟

多目的広場

NPO法人 生活習慣病防止に取り組む市民と医療者の会

第27号 主な内容

2ページ 小象クイズ（腎臓クイズ）
3ページ フォーラムでの講演から「誰でもわかる腎臓病」
板倉病院副院長・板倉サテライトクリニック院長
梶原 麻実子 医師
6ページ フォーラムでの質疑応答
10ページ「運動のススメ」
総合病院国保旭中央病院 糖尿病代謝内科
大西 俊一郎 医師

会報 第27号
2019年6月1日

小象の会
腎臓を守ろう

小象ニュース

●第25回生活習慣病予防治療フォーラム開催
2019年２月16日（土）千葉市民会館小ホールにおいて第25回小象の会生活習慣病予防治療フォーラムが開催され116名の参加者がありました。今回は「私たちの大切な腎臓を守ろう！」をテーマに、腎臓専門医板倉病院副院長梶原麻実子氏の講演に続き、今回初めての試みとして、参加者全員による「腎臓クイズ」と質疑応答が行われました。アドバイザー、回答陣には医師、看護師、管理栄養士、薬剤師、理学療法士、臨床検査技師の皆様が加わり、真剣なやり取りが交わされました。

●会の活動に高い評価―「コープみらい」と「ちば県民保健予防財団」から助成金
コープみらい財団は、人々が安心して暮らせる地域づくりが進むことを期待して、千葉県・埼玉県・東京都内で活動しているボランティア団体やNPO法人などの市民活動を応援する「くらしと地域づくり助成」事業を行っています。小象の会は前年度に続き2019年度の活動について応募し、２月４日に助成が決定され、上限の20万円の助成を受けました。また、ちば県民保健予防財団から、ちば県民保健予防基金事業助成金30万円をいただけることになりました。

小象の健康QUIZ（腎臓クイズ）その1

今回の健康クイズは、２月のフォーラムの会場で行われた腎臓クイズをお出しします。読者の皆様もチャレンジしてください。

問題１
慢性腎臓病は日本ではどれくらいいますか？（20歳以上の成人）
1．3人にひとり
2．5人にひとり
3．8人にひとり
4．15人にひとり
5．20人にひとり

問題２
全国で透析中の患者さんは約何万人？
1．3万人
2．13万人
3．23万人
4．33万人
5．43万人

＝千葉大学＝事務組織を大幅再編

千葉大学は7月1日付けで事務組織を大幅再編した。

財務・研究推進・総務・施設管理業務について、各学部事務から事務局本部への集約化を進めることにより、学長・理事等の大学執行部のガバナンスを強化するとともに、事務コストのスリム化を図ることが狙い。

一例としては、学部に設置されていた経営係（契約・予算管理等）や研究支援係（科研費・産学連携等）を廃止し、事務局本部の財務部や研究推進部に業務を集約することにより、部局毎の予算の見える化と戦略的な資金配分に向けた取組を推進するとともに、科研費をはじめとする研究費の獲得増に向けた支援体制の強化を図る。

また、上記の業務集約化に併せて、各学部毎の事務長制を廃止し、各地区の部長が横断的に学部の事務を統括することとする一方で、質の高い学生サービスを維持するため、学務事務については従前通り学部に存続させた上で、学務専任の課長を配置する。

なお、今年度以降は事務職員の人事異動時期を原則4月から7月に変更する。

（千葉大学企画総務部企画政策課）

千葉大学医学部附属病院に「次世代医療構想センター」開設

次世代医療構想センター長
特任教授　吉村　健佑（平19）

2019年（令和元年）8月より、千葉県から千葉大学医学部附属病院に寄附研究部門として「次世代医療構想センター」が設置されました。ここでは同窓会の先生方に、設置に至る経緯と目的、研究内容の概要、期待される成果をご紹介いたします。

私の自己紹介ですが、千葉大学を卒業して県内で初期研修後、母校の精神神経科で専門研修を受けました。精神科医として県内の病院で勤務した後、2015年から2018年まで厚生労働省に出向し、診療報酬改定や遠隔医療・オンライン診療などの医療情報に関連した政策立案や政策研究に関わりました。その後は千葉大学病院の病院長企画室教員と産業医を兼ね、同時に千葉県医療整備課にて医師偏在対策に関わる職務に従事しています。同窓会活動としては、千葉県ゐのはな会・東京ゐのはな会の役員理事を拝命しております。

さて当センター設置の背景と経緯です。昨今の急激な人口構成の変化をうけ、厚生労働省は2025年と2040年を重要な区切りとして制度設計を急いでいます。2025年はいわゆる「団塊の世代」が後期高齢者となる年であり、さらに2040年は「団塊ジュニア」が65歳以上となる年となります。これらを一つのめどとして「地域医療構想の実現」、「医師偏在対策の推進」、「医師の働き方改革の推進」を「三位一体改革」と位置付けて、行政は医療提供体制の改革を精力的に進めています。また、2018年の医師法・医療法の改正により、医療政策に関する権限の一部を国から都道府県に委譲されており、医療提供体制の改革において、今後は都道府県の役割は重要性を増すことになります。

これまで千葉県は、他の都道府県同様に6年に1度の「保健医療計画」を立案し、それに沿って県内の医療機関の整備や役割分担の明確化などを行ってきました。一方で、千葉大学医学部附属病院は1874年に開設された共立病院にその源流を持ち、以来140年以上にわたって、千葉県内外の医療人材の供給や医療提供体制への貢献など大きな役割を果たして来ました。千葉県と千葉大学医学部は県内の医療提供に互いに大きな役割を担いつつ、その時々の課題に即して連絡・連携をしてきたのが現状です。

前述の医療提供体制の改革を前に、今後は千葉県と千葉大学医学部のより密な連携と協力、情報交換が求められます。両者の連携に際して、いうなれば「県」と「大学」の橋渡し役として期待され設置されたのが当センターです。

当センターの設置目的は3つあります。

1．県内における持続可能で質の高い医療を実現する方策を検討する
2．これから求められる医療人材の育成を通じ、県内に定着する医療従事者の増加を図る
3．医療機関の役割分担と人材配置の在り方について、大学医局等の関係者が互いに連携し意見の集約を図る

目標を達成するために、以下の研究を実施する予定です。数ある診療領域の中から、まずは「政策医療分野」として位置づけられる、小児科新生児科・産科・救急科を優先し、4つの事項に取り組みます。

①各地域のニーズ、病院の機能、医師のキャリア形成の傾向を明確化するための精緻なデータの収集と分析および可視化する
②保健医療計画と大学医局による医師派遣の整合を目指した意見交換の場を通じ、問題点を抽出する
③働き方改革や情報通信技術（ICT）の進展を見据え、医療提供の効率化と新たな提供の在り方を検討する
④今後の医療提供について、医療を受ける側である地域住民に周知する方策と合意形成モデルを検討する

研究成果は、次世代の医療を支える「人材確保戦略」などの形で集約し、当センターで開設予定のホームページなどで積極的に発信してまいります。

センターは3年間の時限付きの設置になります。研究組織として「次世代医療構想部門」と「政策情報分析部門」の2部門から構成され（図参照）、そこに大学内外から気鋭の人材を募りました。専任の特任教員・事務職が計4名、兼任の教職員が16名、合計20名に及ぶメンバーが活動を開始しています。メンバーは30－40代を中心に、若手・中堅から構成され、この新しいプロジェクトに対して意欲的に取り組んでいます。関係各所として、厚生労働省医政局や千葉県内の各医師会とも情報交換・連携を開始しております。

このような性質を持つ部署は千葉県と千葉大学医学部が全国で先駆けて設置するものです。これまでにない新しい部署である「次世代医療構想センター」の成果が新たな大学医学部の在り方・役割を提示し、全国のモデルとなれるように励んでまいります。千葉県と千葉大学医学部、そしてなにより県内の医療機関はまさに「一連托生」です。対立構造ではなく建設的な合意形成を図り、「三方よし」の状態を作り、その結果として医療を受ける地域住民が納得でき、かつ持続可能な医療提供体制が提案できることを願っています。簡単な任務ではありませんが、ベストを尽くします。みなさまの忌憚ないご意見並びにご支援をいただきますよう、よろしくお願いいたします。

課外活動団体だより

亥鼻バンドサークル

医学部5年　多田健太

千葉大学亥鼻バンドサークルは医学部・薬学部・看護学部の学生を中心とした、バンド演奏を定期的に行っているサークルです。亥鼻の団体には他にも軽音楽部というのがあるのですが、そちらの方はDJ音楽を中心に活動している団体であり、いわゆる軽音楽部のようなバンド活動をしているのは本サークルの方です。よく誤解を招くことなので今一度ご確認していただけると幸いです。

亥鼻バンドサークルというのは、部としての活動が多い亥鼻キャンパスの中では珍しくサークルの形態を持った団体であり、そのため定期的な全体の練習会といったものはありません。しかし演奏団体として2か月に1回ほどの頻度でライブハウスで演奏する機会を設けており、その都度サークルのメンバーでバンドを組み、ライブに向け練習をするといった活動をしています。ライブごとに自由にバンドを組むため、J-ROCKはもちろん、洋楽のハードロックやファンクのコピーバンドや、インストバンド、オリジナルを演奏するバンドなどもあり、毎回のライブで様々なジャンルの曲を聴くことができます。毎年11月頃に行われる亥鼻祭でもステージで演奏する機会をいただいており、新入生歓迎会の時期にはIDC（亥鼻ダンスサークル）と合同でライブ、夏には有志で合宿も開催したりと活動内容は充実しています。

サークルの人員も気軽に参加できるといったことからその規模は大きくそれぞれ医学部33名、薬学部28名、看護学部13名が所属しています。毎年OB方が集まり演奏するOBライブも開催しています。昨年度はOBの方のつながりにより、5月に幕張で開催された日本呼吸器外科学会の打ち上げ会場のライブハウスで演奏するという貴重な機会をいただくこともできました。

以上のように、本サークルはサークルという自由度の高さを生かし、楽しくバンド演奏をさせて頂いております。何かの機会で亥鼻バンドサークルの演奏を聴かれる機会がありましたら温かく見守っていただきますようお願いいたします。

役員名

代表：陸　伊洋
主務：大久保愛未
副務：辻本　紀加
会計：米岡遼太郎

2019年２月　定期ライブ後の集合写真

バイオインフォマティクス研究会

医学部5年　荻野智大

「生命とは何か」という疑問は古くから問いかけられ、数多くの研究者の興味関心を誘ってきた。今日、生命は「環境の変化に対応するロバスト性と可塑性を兼ね備えた物」として説明されることが多いが、その本質的な理解・時間的挙動の把握には数式を用いた記述が最も適しており、また直感的にも理解しやすいものである。当バイオインフォマティクス研究会では、研究志向の学生同士で上述のような生命現象を理解するための基本的な数学・情報工学の理論の学習及び解析手法の実践を行っている。勉強会は学部学生のみならず、博士課程所属の学生や学士編入生、そして医学部卒業後臨床医として働いている先生など、様々な背景を持った人達で構成されている。そのため、数学が好きな人、機械学習を実践で行っている人、生命系の実験が得意な人、臨床上の疑問を提起する人と、多種多様な意見を共有し、例えば統計解析手法の問題ひとつをとっても多角的に議論ができる場として発展している。

生命現象を理解する手段として、データ駆動性と仮説駆動性の二種類があると言われている。ここで、データ駆動的な研究を行うためにはバイオインフォマティクスに代表される統計や関数解析、また最近流行の機械学習といった手法を取られることがある。一方で仮説駆動性の研究をしようと思うと、常微分方程式や力学系の理論を用いた数理モデルの解析が重要となってくる。その他にも理論的にきちんと詰めようとすると、基本的な数学が必要不可欠であり、学ぶべき範囲は多岐にわたる。これを個人で行うのには限界があり、また難所に当たった際にモチベーションを保つのも困難である。そこで志を同じくする学生同士で集まって勉強をすることで、分からないところは教え合いつつ知識の幅を広げ、また実践的な研究にも取り組んでいこう、というのが本会の意図するところである。少しでもこのような研究分野に興味があったり、数学したい！という方がいらっしゃれば、是非とも一度本会を覗きに来ていただければ幸いである。

役員名

会　長：荻野　智大
副会長：佐野　恭平
会　計：小林　秀輔

勉強会後の食事会。健康な数学は健康な身体に宿る。
栄養もしっかり取ろう！

欧州医学史巡り

欧州医学史巡り ―パリ　その2

杉田克生（昭54）

本誌172号（2016年5月発行）で、「欧州医学史巡り－パリ－」と題してパリ第5大学医学史博物館やオテル・デューを簡単に紹介した。パリには医学史関連施設が数多くあり、今回はMuseé Curie（キュリー博物館）を紹介する。マリー・キュリー（Marie Curie 1867年11月7日～1934年7月4日）はポーランド、ワルシャワ生まれの物理学者・化学者であるが、日本ではキュリー夫人の名前で知られている。放射線の研究で1903年に女性としては世界で始めてノーベル賞を受賞（物理学）、その後1911年にノーベル化学賞も受賞し、パリ大学初の女性教授にも就任している。

地下鉄Culuny La Sorbonne駅から歩いて、途中ソルボン大学を横目に見ながら、パンテオンをさらに南に5分ほどUlm通りを歩くと、右手にその名もPierre et Marie Curie通りがあらわれる。以前はラジウム研究所と称されたキュリーが実験をした施設で、現在は博物館となっている。水曜から土曜の午後1時から5時まで無料で公開されている（写真）。館内はA "The family with five Nobel Prizes", B "Radium, between myth and reality", C "The Curie Laboratory, between physics and chemistry", D "The Foundation Curie: treating cancer" の4部門に分けられ、それぞれ関連する写真やポスター、実験装置や試薬、医療用機材や治療用品などが展示され誰もが見学できる。

4部門中C部門にはキュリー夫妻の研究が時間軸で展示説明されている。夫ピエールが論文研究のために確保したパリ市立工業物理化学高等専門大学のラボラトリーは、倉庫兼機械室を利用した暖房もない粗末なものだった。そこにピエールとマリーはさまざまな計測器などの機器を持ち込み、ウラン化合物の周囲に生じる電離を計測し、サンプルの放射現象がウラン含有量に左右され、光や温度などの外的要因に影響を受けないという結論に達した。マリーは、この現象がウラン固有の特性かどうかを調べるために既知の元素80以上を測定し、トリウムにも同様の放射があることを発見した。これらの結果から、マリーはこれらの放射特性に放射能（radioactivity）、そしてこのような現象を起こす元素を放射性元素（Radioelement）と名づけたことが概説されている。

偉大な研究者により提唱された新たな科学的概念を理解するためには、その発見に至る歴史的経過を知ることが一番であり、医学史・科学史を学ぶ重要性もそこにある。なおこの研究所で偉大な業績を残したマリーは1934年7月4日死亡し、ピエールが眠るソーの墓地に夫と並んで埋葬された。その60年後の1995年、フランス政府はキュリー夫妻の業績を称え、二人の墓はパンテオンに移されフランスに貢献した偉人に加えられた。

写真　キュリー博物館正面

10/26 開催

ゐのはな同窓会のみなさまへ
千葉県「医系技官（公衆衛生医師）」
業務説明会・保健所見学会開催のお知らせ

千葉県では県庁・保健所で活躍する医師を募集しています！！

昨年、好評を頂いた本企画、今年もやります！行政職に関心をお持ちの医師、研修医、医学生、連絡をお待ちしています。もちろん行政未経験者も大歓迎です！

会　場　習志野健康福祉センター（習志野保健所）
習志野市本大久保５－７－14
＜最寄駅＞京成電鉄　大久保駅　徒歩９分

日　時　令和元年10月26日（土）
15：00～17：00（終了後懇親会へ）

説明会の内容　○現役の千葉県医系技官より業務説明、個別の相談、保健所見学
※説明会終了後、懇親会を予定しています

申込み方法　下記へ10月23日（水）までに「Ｅメール」にてお申し込みください。

（1）件名：「業務説明・見学会参加申込」とご記載ください
（2）本文：氏名、性別、年齢、連絡先の電話番号及びＥメールアドレス、
簡単なプロフィール（医歴、研修医、医学生など）、懇親会参加の有無
（3）送付先：kfj@mz.pref.chiba.lg.jp
※お問合せ先：千葉県健康福祉部健康福祉政策課人事班・芝原直樹（電話）043-223-2605（直通）
企画・運営：千葉県健康福祉部医療整備課・吉村健佑（平成19年卒）

令和元年度　千葉大学医師会　日本医師会認定産業医研修会
基礎（後期・実地）・生涯（更新・実地）開催のご案内

標記研修会を下記の通り開催いたしますので、ご参加くださいますようご案内申し上げます。
なお、本研修会は、日本医師会認定産業医制度における**認定産業医になるための研修及び更新を希望する医師**の研修です。

研修会場：ゐのはな同窓会館

1．主　　催：千葉大学医師会
2．日　　時：令和元年11月13日（水）18時～20時
3．場　　所：千葉大学医学部ゐのはな同窓会館　ホール
　　千葉市中央区亥鼻１－８－１
　　千葉大学亥鼻キャンパス内
　　※ご来場の際は公共の交通機関をご利用願います
4．定　　員：50名
5．受 講 料：千葉大学医師会員　無料
　　非会員：2,000円（当日、現金にてお支払ください）
6．申込方法：受講希望者は
　　①氏名（フリガナ）
　　②所属医療機関名
　　③医籍登録番号
　　④連絡先住所（ご自宅又は勤務先）
　　⑤連絡先TEL、FAX又はe-mail
　　⑥基礎研修・生涯研修　該当される方をご記入ください
　　以上を**明記の上、メールまたはFAXにて下記宛に10月24日（木）**までにお申込みください。

＊定員に達しない場合は上記期日以降も受付致しますので先ずは下記までお問合せください

千葉大学医師会　事務局
〒260-8670　千葉市中央区亥鼻１－８－１　千葉大学医学部内
Fax：043－202－3757　　e-mail：ishikai@c-med.org

※定員になり次第締め切ります。
※受講票は発行しませんが、申込み受付後、⑤の連絡先（FAX又はe-mail）宛に確認のご連絡をいたします。
※受講シールは当日研修会終了後に手交いたします。

7．**研修内容**：基礎（後期　１単位・実地　１単位）又は生涯（更新　１単位・実地　１単位）　申請中

「最近の労働衛生行政について」「作業環境測定実習」
千葉大学大学院医学研究院　環境労働衛生学　教授　諏訪園　　靖
同　講師　能　川　和　浩
同　助教　渡　邉　由芙香

※生涯教育講座のカリキュラムコード：６．医療制度と法律　１単位、11．予防と保健　１単位が取得可能

問合せ：千葉大学医師会　事務局
TEL：043－202－3755
FAX：043－202－3757
e-mail：ishikai@c-med.org

医療従事者向け**生命保険・損害保険**のご用命は・・・
千葉大学ゐのはな同窓会「会員総合補償制度」担当
PIONEER **株式会社パイオニア**
Tel.0475-23-8442（営業時間 8:30-18:00）　https://www.pioneerltd.com/

令和元年度　第1回理事会議事要旨抜粋

日　時：平成31年4月17日（水）18時より
場　所：ステーションコンファレンス東京
出席者：
済陽高穂（わたようたかほ）（会長）
鈴木信夫（副会長）
吉川広和（副会長）
吉原俊雄（副会長）
秋葉哲生（会計監事）
大井利夫（参与）
税所宏光（参与）
青木　謹　安西尚彦
上田真喜子　岡本和久
小野田昌一　黒木春郎
白澤　浩　鈴木　守
諏訪敏一　諏訪園靖
十川康弘　中村眞人
幡野雅彦　花輪孝雄
林田和也　星野　聡
宮本恒彦　横須賀忠
（敬称略）

済陽高穂会長の挨拶の後、同会長が座長となり議事が進められた。

議題

1．報告事項

(1)広報編集関係

白澤浩理事より、ゐのはな同窓会報181号は令和元年5月10日発行予定であることが報告された。

(2)その他

鈴木信夫副会長よりオンライン会報に、以前に掲載したもので更新希望があれば申し出て欲しいとの説明があり、オンライン会報内の情報や内容の整理については、検討中である事が述べられた。

2．協議事項

(1)名誉会員の推薦について

白澤浩理事より、資料に基づき説明があり、名誉会員推薦に関する内規に則り、近畿ゐのはな会より石川正士氏、千葉県ゐのはな会より浅野尚氏、静岡ゐのはな会より忍頂寺紀彰氏、大学ゐのはな会より織田成人氏の4名を候補者として総会に諮ることが了承された。

(2)令和元年度役員について

白澤理事より、資料に基づき、令和元年度の新理事（理事会にて承認済み）、群馬ゐのはな会鈴木守氏、信州ゐのはな会小林敏生氏、静岡ゐのはな会宮本恒彦氏、大学ゐのはな会安西尚彦氏について説明があり、総会にて追認することが承認され、地区ゐのはな会、会務分担、評議員についても説明され了承された。

(3)平成30年度決算

①決算報告

幡野雅彦理事より、資料に基づき、収入については、会費等は2月まで未納の会員には、督促状にて納入を促したこと、平成31年度入学生の会費・入会金も含まれること、卒後50周年記念基金として昭和43年卒から寄附があったことについて説明された。支出については、ほぼ例年並みであるが亥鼻祭への支援、支部活性化のため各支部への助成を増額したこと、予備費よりゐのはな同窓会館追加工事費用、国際医療福祉大学教授就任祝賀会の共催費用を支出したこと、卒後50周年の寄附を基金として積立てた事が説明されいずれも承認された。

②会計監査

秋葉哲生会計監事より、平成30年度の監査結果について会計処理が適正である旨、資料に基づき報告された。

(4)令和元年度事業計画

白澤理事より資料に基づき、メモリアル事業について説明があり正式名称として了承された。

(5)令和元年度予算案

幡野理事より資料に基づき、収入は、会費等の収入を実績に合わせ減額し、建設準備金（基金より取崩し）は数年の利用がないため計上せず、支出は、郵便振替手数料の値上げにより振替手数料を増額、留学生交流支援費は数年の利用がないため計上せず、同窓サポートプロジェクトはパネルの設置代が不要のため減額した事などが説明され、承認された。

(6)ゐのはな同窓会賞選考結果

白澤理事より、資料に基づき、功労賞の候補者1名について説明があり、推挙された候補者について選考委員会にて検討した結果、齋藤康氏（新潟大・昭43）が推薦された旨の報告があり、承認された。

(7)総会議題等について

秋葉哲生会計監事、黒木春郎理事より資料に基づき、総会は令和元年6月8日（土）15時20分から千葉大学医学部附属病院ガーネットホールにて開催し、講演は「若手育成の取組の実績と今後」、「千葉で開催！オリンピック・パラリンピックを医療から支える」として、また、特別講演を生坂政臣氏に依頼、懇親会は18時から開催する等の説明があった。

(8)メモリアル事業について

白澤理事より、メモリアル事業委員会の開催を予定しており、吉川副会長より近日中に第1回委員会を開催する準備中であることが報告された。

(9)その他

・大学の行事予定を会報に掲載希望。

・ゐのはな同窓会会務分担について、対外的な情報ネットワークを把握できる担当理事の事業部、厚生労働省など行政、医師会に属する担当理事の事業部など作業を整理して見直し、理事会に提案や報告ができるような分担案を今後検討するべきではないかとの提案。

・評議員については、評議員会担当理事を作り同窓会からの情報発信をするよう進めてはとの意見。

・評議員を通じて、平成卒の会員などとの連携を希望。

・同窓会に入会してのメリットを考案。例えば、中堅、若手へのサポート事業。若手に対する投資、バックアップ体制。学術・医療上、多大な貢献が期待される会員への支援など。

・同窓会では世代間の交流ができる事がメリット。

令和元年度　ゐのはな同窓会総会議事要旨

日　時：令和元年6月8日（土）15時20分より
場　所：千葉大学病院ガーネットホール
出席者：61名
委任状：590名

中村眞人理事の司会により開会となり、まず物故者64名に黙祷を捧げた。済陽高穂（たかほ）会長の挨拶の後、同会長が議長に選出され議事が進められた。

議事

(1)名誉会員の推薦について

白澤浩理事より、内規に基づき推挙された4名の名誉会員の推薦について説明があり、承認された。（6面に掲載）

(2)年次活動について（報告事項）

①庶務部報告

白澤理事より、平成30年度の各会議開催や各支部との交流等について報告された。

②事業部報告

同理事より、同窓会賞の授与、同窓会報の発行、同窓サポート・プロジェクト、メモリアル事業、卒後50周年基金等について報告された。

(3)平成30年度決算について

①決算報告

幡野雅彦理事より、収入については、会費収入等はほぼ予算どおりであるが、卒後50周年基金に昭和43年卒業のクラスより350万円の寄附があったこと、支出については、ほぼ例年通りの執行であるが、亥鼻祭への支援、予備費よりゐのはな同窓会館追加工事費用、国際医療福祉大学教授就任祝賀会の共催費用を支出し、卒後50周年基金を積立てた事が報告された。以上の報告により平成30年度の決算報告が承認された。

②監査報告

秋葉哲生会計監事、岩倉弘毅会計監事より、監査報告について説明があり、決算案が承認された。

(4)令和元年度事業計画について

白澤理事より、会報発行、各地域ゐのはな会への支援、各地域ゐのはな会（会員）・本部間の交流、研究・教育助成、IT広報関連事業、メモリアル事業、同窓会員組織の充実、同窓サポート・プロジェクトなどの事業計画について説明があり、承認された。

(5)令和元年度予算案について

幡野理事より、収入については、ほぼ前年どおりであるが、建設準備金は数年使用がないため計上せず、支出については、ほぼ前年と同じであるが、郵便振替手数料値上がりのため会費収納費を増額し、留学生交流支援費は数年使用がないため計上せず、同窓サポート・プロジェクト経費はパネル設置費用がないため減額した事などが説明され、令和元年度の予算が承認された。

(6)役員の選出について

白澤理事より現役員の任期（2年）満了に伴う役員の選出について説明があった。

①会長・副会長・会計監事・参与

会長、副会長、参与、会計監事の役員再任が承認された。

②理事

各地区ゐのはな会より新たに選出された理事

鈴木　守氏　小林敏生氏
宮本恒彦氏　安西尚彦氏
4名が承認された。

③評議員

新正会員から1名が選出され承認された。

会務分担、総務会、活性化WG、メモリアル事業委員会のメンバーについて説明され承認された。

(7)その他

吉川廣和副会長・メモリアル事業委員会委員長より、5月29日に開催された第1回メモリアル事業委員会について説明があり、同窓会館に併設したメモリアルウォール建設案等があったが、資金計画の問題などあり進められていなかったため、委員会を設置し検討する事とした。目的、規模、理念を明確にし、寄附、募金の専門家の意見を参考にするなど新研究棟移転に伴う貴重な財産の保管場所確保、千葉市民と医学部との交流など様々なアイデアを出し合い、医学部150周年を区切りとして活動予定である事などが説明された。

秋葉哲生理事の辞により閉会となった。

ゐのはな同窓会賞伝達式

白澤理事の司会により、功労賞受賞者齋藤康氏の表彰式が行われ、済陽会長より表彰盾と副賞が授与された。

ゐのはな同窓会受賞者挨拶

功労賞受賞者齋藤康氏が挨拶された。

講演

「若手育成の取組の実績と今後」

座長加藤直也氏の紹介により、吉村健佑氏による講演が行われた。

「千葉で開催！オリンピック・パラリンピックを医療から支える」

座長織田成人理事の紹介により、山口智志氏による「スポーツメディクスセンター：スポーツに関わる全ての人の安全、安心のために」と題した講演が行われた。

特別講演

座長織田成人理事の紹介により、生坂政臣氏による「誤診学のススメ－外国人編－」と題した、特別講演が行われた。

懇親会

吉村健佑氏の司会により開会され、済陽会長の挨拶に続き、乾杯のご発声、新名誉会員等からご挨拶を頂き、歓談の時を過ごし閉会となった。

お詫びと訂正

181号
34面
課外活動団体だより
山岳部　役員名
主務：村上拳太郎
←
主務：村上拳太郎

お詫びして訂正させて頂きます。

令和元年度予算

収入の部

款　項　目	予算額（円）
会　費　等	19,900,000
事業収入（註1）	6,500,000
他会計より受入	10,000
寄　付　金	500,000
基金より取崩し（註2）	0
雑　収　入	18,000
（当期収入計）	26,928,000
前年度繰越金受入	7,128,717
収入合計	34,056,717

支出の部

款項目（節）	予算額（円）
総　務　費（註3）	13,200,000
事　業　費（註4）	16,060,000
事業税等	1,400,000
予　備　費	3,296,717
積　立　金	100,000
次期繰越金	
支出合計	34,056,717

平成30年度決算報告

収入の部

款　項　目	予算額（円）	決算額（円）	対予算額（円）
会　費　等	20,050,000	18,950,000	－1,100,000
事業収入（註1）	6,500,000	6,810,738	310,738
他会計より受入	20,000	1,440	－18,560
寄　付　金	700,000	3,930,000	3,230,000
基金より取崩し（註2）	3,000,000	0	－3,000,000
雑　収　入	20,000	12,017	－7,983
前年度繰越金受入	10,357,426	10,357,426	
収入合計	40,647,426	40,061,621	－585,805

支出の部

款項目（節）	予算額（円）	決算額（円）	対予算額（円）
総　務　費（註3）	13,100,000	10,668,222	－2,431,778
事　業　費（註4）	19,560,000	16,512,482	－3,047,518
事業税等	1,400,000	1,352,200	－47,800
予　備　費	6,487,426	3,800,000	－2,687,426
積　立　金	100,000	3,600,000	3,500,000
次期繰越金		4,128,717	4,128,717
支出合計	40,647,426	40,061,621	－585,805

註1～4：収入、支出の主要細目等

		款　項　目		令和元年度予算	30年度予算
収入の部	（註1）	事業収入	会員総合補償制度集金事務費	6,500,000	6,500,000
	（註2）	基金より取り崩し	同窓会基金より同窓会館関連施設建設準備金に充当	0	3,000,000
支出の部	（註3）	総務費	会議費	3,500,000	3,500,000
			人件費	7,000,000	7,000,000
			その他	2,700,000	2,600,000
	（註4）	事業費	会報・会誌	5,400,000	5,350,000
			学事奨励　・ゐのはな賞	550,000	550,000
			・ゐのはな美術展	200,000	200,000
			・猪之鼻奨学会	400,000	400,000
			各種助成　・附属図書館	800,000	800,000
			・白衣式	700,000	700,000
			・国際交流支援	100,000	100,000
			・ちばBCRC支援	240,000	240,000
			・留学生	0	100,000
			・白菊会	200,000	200,000
			・支部	4,100,000	4,100,000
			・同窓サポートプロジェクト	1,500,000	1,950,000
			・IT関連事業費	1,200,000	1,200,000
			同窓会館建設費等	0	3,000,000
			その他	670,000	670,000

オンライン会報案内

http://www.inohana.jp/online/index.html

オンライン会報　総合目次

＊本ページの動画はmp4形式です。ご覧になれない場合は、mp4対応のプレーヤーをインストールしてください。
＊古い動画コンテンツの中には僅かですが専用の再生ソフトが必要なものがあります。

- 病院紹介
- 求人・求職
- 同窓会員経営の病院・医院・診療所の紹介
- 生涯学習講座
- インタビュー
- 国際交流
- 都道府県医師対策
- オンライン書庫
- 同窓会
- クラス会・他大学等
- キャンパス便り
- 福祉関連情報
- 「ほっとひといき」ちば通信（千葉日報）
- 協賛企業からのお知らせ

オンライン会報用
QRコード®

オンライン会報　総合索引

- 氏名
- 病院・医院・診療所

オンライン会報　編集担当交代のご挨拶

千葉大学大学院医学研究院薬理学　安　西　尚　彦（平２）

この度、令和元年８月より、前任の鈴木信夫名誉教授よりご依頼を頂き、オンライン会報編集担当を務めることとなりました、千葉大学大学院医学研究院薬理学の安西でございます。６月の令和元年度ゐのはな同窓会総会にて同窓会役員（理事）を拝命しましたのに続き、大役をお引き受けすることとなり、身の引き締まる思いでございます。

オンライン会報は、従来の活字版会報を補充する動画記録主体の会報であります。平成19（2007）年５月に鈴木信夫先生が創設され、以来12年に渡り、同窓会員へのインタビュー、病院紹介、同窓会員経営の病院・医院・診療所の紹介、生涯学習講座などの300にも及ぶ数の番組を掲載しております。創設時は毎月200数十件であったアクセスも、５年後の平成24年には1,000数百件と増大し、今に至っております。

既に10年以上の歴史を持つインターネットサイトとなったオンライン会報ですが、この間にも我々を取り巻く環境、特にデジタル環境は大きく変わりました。私がAppleのiPhone 4 を手に取ったのは2011年１月ですが、最初はガラケーとの併用でインターネットサイトを見るものでしたが、今ではガラケーを持っているだけで珍しがられ、年齢が下がれば下がるほどスマホ（スマートホン）利用が高率となり、4Gあるいは5G導入により誰でもどこでも動画が楽しめる時代となりました。FacebookやTwitter、LINE、さらに最近ではInstagramというSNSが世界的に広まり、その利用者間における迅速な情報共有が可能となったことで、インターネットサイトの役割も次第に変りつつある状況です。

多くの学会が会員減に悩み、経費削減の手段の一つとして、学会誌のpdf化が進められ、印刷媒体による情報交換の役割が縮小しつつある中、それは動画サイトにも及びつつあり、特別な再生ソフトやプレーヤーを必要としないYouTubeを主体としてスマホ利用者が簡単に利用できる動画へと移行してきております。

オンライン会報ではこれまで通り、「医学・医療の原点を伝える」という鈴木信夫先生の方針を堅持し、同窓会や学年別クラス会、亥鼻祭の模様などゐのはな同窓会活動を始め、キャンパス便り、クラス会・他大学等、病院紹介などを引き続き掲載し、時事刻々と変わる亥鼻キャンパスの状況を動画配信して行きたいと思います。

それと同時に、年々若い世代の同窓会費納入率が減っている現状を踏まえ、ゐのはな同窓会のSNS（Facebook、Twitter等）を開設し、さらにリアルタイムでの情報発信に努めるとともに、動画の配信に関しましても、SNS利用者を意識しYouTubeなどの利用も導入して、活動範囲の広がって行く同窓会員のdiversityに対応できるオンライン会報にウイングを広げて行きたいと思います。

当然これらのことは私一人で実現することは出来ません。ゐのはな同窓会職員の方々は勿論、同窓会員の中でも、特に若い世代の方々に力と知恵を貸して頂きたく、以前一度組織化された「オンライン会報編集委員会」を再編成することも視野に入れ、体制づくりも目指して行きたいと思います。

引き続き今後ともよろしくご指導のほど、お願い申し上げます。

令和元年６月８日（土）に開催されたゐのはな同窓会総会等、更新された動画をご紹介いたします。

■同窓会

ゐのはな同窓会長
済陽　高穂

第24回ゐのはな同窓会賞　功労賞
齋藤　康（千葉大学名誉教授）

令和元年度　ゐのはな同窓会総会
令和元年６月８日（土）15時20分～
於　千葉大学医学部附属病院　ガーネットホール
［2019. 7. 26掲載］

吉村　健佑
千葉ゐのはな会・東京ゐのはな会　理事
千葉大学医学部附属病院　特任講師

ハーバード大学留学生

若手育成の取組の実績と今後
・次世代リーダー育成海外留学支援　▶映像を見る
・育星塾　▶映像を見る
・千葉県地域枠の現状と千葉大学に期待する地域医療の役割　▶映像を見る
令和元年度　ゐのはな同窓会総会（2019. 6. 8）における講演
［2019. 7. 26掲載］

■生涯学習講座

医療を通じてチバを盛り上げる！
三田　恭義
（松戸市立総合医療センター耳鼻いんこう科　医長）
令和元年度
千葉県ゐのはな会総会
（2019. 6. 8）における講演
［2019. 7. 26掲載］

誤診学のススメ　～外国人患者編～
生坂　政臣
（千葉大学医学部附属病院　総合診療科長）
令和元年度ゐのはな同窓会総会
（2019. 6. 8）における講演
［2019. 7. 26掲載］

スポーツに関わる全ての人の安全、安心のために
山口　智志
（千葉大学国際教養学部　准教授）
令和元年度ゐのはな同窓会総会
（2019. 6. 8）における講演
［2019. 7. 26掲載］

■インタビュー

明治政府の医学教育
－千葉大学医学部発展の時代背景－

平野　綏（やすし）（写真右）茨城大学名誉教授
聞き手　杉田　克生（写真左）前千葉大学教授
・明治政府の医学教育　▶映像を見る
・近代医学教育の地方管理から、政府直接管理への転換　▶映像を見る
［2019. 4. 24掲載］

メモリアル事業についてのアンケート　ご協力のお願い

ゐのはな同窓会会員の皆様へ

日頃よりゐのはな同窓会へのご理解をいただき、ありがとうございます。本会報一面でお知らせしておりますように、ゐのはな同窓会では千葉大学医学部に関わるメモリアル事業案を検討中です。つきましては、同封のアンケート用紙にご記入いただき、率直なご意見・ご要望をお聞かせください。

主なアンケート項目

Ｑ１　新棟移転にあたり、現医学部本館（旧病院）で保存して欲しいとお考えのものについて、優先順位をつけて下さい。

Ｑ２　旧病院自体の保存が難しい場合、メモリアルとして残して欲しいとお考えのものについて、優先順位をつけて下さい。

Ｑ３　大学の歴史的物品（レガシー）を保存・展示するとしたら、場所はどこが良いとお考えですか？ 優先順位をつけて下さい。

Ｑ４　メモリアル事業として行って欲しい企画案等がありましたら、お知らせ下さい。

インターネット回答用
QRコード

千葉医学95巻３号　2019年６月

最終講義

倦まず弛まず小児外科医の道　吉田英生

肝炎の診療と研究　－40年をふりかえって－　今関文夫

総　説

千葉大学のドイツ・ベルリン拠点形成
－2018年までの取り組みと今後の計画－
柏原　誠　中岡宏子　戸髙恵美子　川波亜紀子
志賀里美　森　千里

原　著

当科における異所性妊娠に対するメソトレキサート療法の検討
高橋論慎　西脇哲二　大見健二　奥谷理恵　佐藤明日香
羽生裕二　松本玲子　岩崎秀昭　碓井宏和

学　会

第1382回千葉医学会例会・平成30年度内分泌代謝・血液・老年内科学例会

第1399回千葉医学会例会・第52回麻酔科例会・第80回千葉麻酔懇話会

編集後記　生水真紀夫

Chiba Medical Journal

Original Article

Effectiveness of self-directed cardiopulmonary resuscitation learning in lay rescuers: infant basic life support study
Naoki Shimizu, Takanari Ikeyama
Masahiko Nitta, and Kunio Ohta

Direct medial approach for primary total knee arthroplasty: preliminary results of a novel surgical technique
Junichi Nakamura, Koh Shimizu, Toru Suguro, Shigeo Hagiwara
Sumihisa Orita, Tsutomu Akazawa, Takayuki Nakajima
Yawara Eguchi, Kazuhide Inage, Yasuhiro Shiga, and
Seiji Ohtori

Short Communication

Helpful techniques for usage of catheter introducers（catheter inserters）: processing using microguidewire introducers or microguidewire shaper
Yousuke Watanabe, Akihiko Adachi, and Yasuo Iwadate

千葉医学95巻４号　2019年８月

最終講義

ヒトの健康を，人類進化を考慮した遺伝的要因，社会的要因から考える　羽田　明

頭頸部の免疫・アレルギー
～臨床試験を振り返って～　岡本美孝

症例から学ぶ救急集中治療医学　織田成人

症　例

腹腔鏡下に安全に摘出しえた遺残ガーゼ腫瘤の１例
中田泰幸　清水善明　近藤英介　西谷　慶　伊藤勝彦
横山航也　清水公男　石井隆之

学　会

第1381回千葉医学会例会・第18回呼吸器内科例会（第32回呼吸器内科同門会）

第1392回千葉医学会例会・第36回千葉精神科集談会

編集後記　亀井克彦

Chiba Medical Journal

Original Article

Risks attending the use of hypotonic solution in the pediatric intensive care unit
Naoki Shimizu, Bakhtiyar F. Zeynalov, and
Nao Nishimura

Chiba Medical Society Award Review

Development of noninvasive diagnosis of cardiovascular diseases and education of cardiac imaging technology
Hiroyuki Takaoka

おくやみ

奥　義弘（九州大医・昭10）
斉藤　総明（専20）
宮本　栄（専23）
有泉　憲之（東京医大・昭23）
宇井　郁朗（岩手医専・昭24）
北村　玲子（東京女医大・昭24）
木村　滋（昭23）
石川　哲也（専24）
村上　一正（昭25）
加瀬　貞治（昭26）
武市　亨（昭28）
山森　喬夫（昭29）
貴家　昭而（昭30）
小林　茂（昭30）
松丸信太郎（昭31）
飯塚　正章（昭32）

曽川　祖訓（昭32）
金城　和夫（昭38）
齋藤　裕康（昭39）
滝沢　和彦（昭39）
冠木　徹彦（昭40）
菅沼　正邦（院卒・昭42）
遠藤　政隆（昭44）
坂本　建彦（昭44）
丹羽　有一（昭46）
赤松　徹（昭48）
高師　勝男（東北大薬・昭52）
國枝　寛（昭55）
久保　英三（昭59）
佐藤　直秀（昭62）
窪田　伸矢（平10）
安部　大地（平26）

編集後記

猛暑の夏でしたが、会員各位におかれましてはいかがお過ごしでしょうか。総会記事に始まる本号も、躍動を続ける同窓の様子をお伝えできていることと信じます。

亥鼻キャンパスは現在、附属病院中央診療棟、医学系総合研究棟の新築を中心とする土木工事の真っ只中ですが、最近さらにキャンパス南西面沿いのバス道路の拡幅工事が始まりました。交通安全や美観の点からも長らく待望されていたことではありますが、キャンパスの敷地に7メートルも食い込みます。このため、道路沿いの鬱蒼としていた樹木がほぼ完全に伐採され、景観の変化に驚かされます。ですが、老齢化し倒木の危険なども指摘されてきており、回復整備計画もしっかりしている様でありますので、緑の再生新生を期待したいと思います。

さて、この拡幅に伴い、写真の石碑が移設されました。これは「長尾　荻生　両君紀念樹」碑で、背面には「櫻樹六拾五株　楓樹六拾五株　明治四十四年三月植之」と記されておりますので、１０８年前の１９１１年に、千葉医学専門学校初代校長　長尾精一と二代校長　荻生録造の功績を讃えて植樹を行なった際の紀念碑と思われます。現在のキャンパスの豊かな緑も、ほとんどが人々の営々とした植樹によるものです。

写真から解る様に、実は、移設前は下三分の一が土に埋もれておりました。１００年余りの時の流れが感じられます。場所は、看護学部の玄関付近（当時の県立千葉病院正門付近）で、今回、バス通りから看護学部寄りに数メートル移設されました。現在、周囲は未整備ですが、工事完了のあかつきには、機会がございましたら、是非お立ちお寄りください。

瀧口正樹（昭56）